# その男、神の眼につき　part2

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その男、神の眼につき　ｐａｒｔ２

【Ｎコード】
Ｎ０９８０Ｘ

【作者名】
神戒

【あらすじ】
時衛士が目覚める。
同時に、機関が、協会がそれぞれ動き出した。
そして巻き込まれる大勢の人間。巻き込まれる世界。やがて世界各国の軍も動き出し、参戦する。
時衛士はその中で、とある人探しを命ぜられた。
ただの傭兵。されど世界でもその道の人間ならば知らぬ程に有名で有能な、一人の男。
彼はその男の手がかりを見つけてロシアへと飛ぶのだが――。

可及的速やかに拡散する物語。
時衛士の、世界の運命はやがて決する事になる。

# プロローグ

夕刻から続く雨は、空が完全に闇に飲まれた頃に少し弱まった。
舗装されていない土は水を吸い込んで、ただ歩くだけでも体勢が不安定になるほどにグズグズだ。街から少し離れたそこを、手負いの男をつれた二人組が泥まみれになりながら走り続けていた。
腕から出血し、涙や鼻水に顔を汚しながら、何かに追われるように背後を注意深く気にして駆ける。彼らがそれぞれ手に握る突撃銃（アサルトライフル）の残弾は残り僅かであり、そしてそれが彼らの命を繋ぎ止める命綱であった。
「大丈夫かダニー！　俺はここにいるぞ！」
肩を担ぎ、そして泥に滑って勢い良く転ぶ。肩を打ち付け呻く相棒に叫びながら、男は彼の支えになって立ち上がらせた。
道という道はない。
そして背後からは、ただ一人の男が、走るわけでもなく、されど距離を開けても薄れることのない威圧だけを放出して彼らを追っていた。
「ちくしょう、畜生（くそったれ）！　なんで俺らがこんな事になってんだよッ！」
手負いが喚く。どうしようもない現実に押しつぶされて、その精神は限界を超えていた。
――外の警備だからと、わざわざ機関の外に出て周囲を警戒していただけだった。
だというのに今はなぜだか逃げている。それは、”特異点能力者”に「逃走者」だと罵倒され、襲われたからだ。だがその『特異能力』ではなく、拳銃で腕を撃ちぬかれた。
そうして現在に至るが、逃げ切れるわけがない。
機関を相手にして、それが可能なはずがない。
ついさっきまで機関に所属していた彼らだからこそそれを確信する。”逃走者”は機関から抜けだそうとした愚か者だ。その末路は

肉塊でしか無い。極めて例外がないその存在は、仲間からの抹殺で役目を終える。
「なあダニー、知ってるか？」
「ああ、俺たちはもうすぐ死ぬってな」
「いや違う。同じ機関でも、もっと素晴らしい所があるらしいんだ」
「はっ、どうせアメリカだろ？」
もはや自暴自棄に、歩く気力すらなくなったダニーは座り込んで空を仰いだ。深淵を覗き込んだような色をする天。己の心とまったく同じ色をしたソレを見て、これからの事がどうでもよくなった。
どうせ死ぬ。
ならさっさと殺してもらったほうがいい。
ダニーは背中から倒れて、寝転んだ。
「日本だ。あそこはなんでも、たった一人の少年に”賭けて”いるらしい」
「少年（がき）に？　なんでまた」
「知らねーよ。ただこっちにまでその話が届くって事は、この世界でも結構有名なんじゃねーのか？」
――身体中の血が熱い。
機関にも少し違和感が現れ始めた。
協会もそろそろ本気を出すという。
そして俺たちが死ぬ。だが、妙な希望を抱いてしまう。
この後のこと。自分たちには一切関係ないのに、この後に大きくこじれるであろう世界情勢――もっとも”裏”の、だが――が整えてくれるかもしれない。その妙な希望だ。
死を悟るから、妙にそういった事を考えてしまうのかもしれないが、それでも、完全な絶望に飲まれて死ぬよりはよかった。
もしかすると、少しでも光を見たいからと思考が極端になっているだけかもしれないが。
「たははは！　何だ、逃走者のクセに逃げるのを諦めたのか？」
雨音に紛れた足音は、やがて彼らの前で止まる。

たった一挺の拳銃を握る男は、闇の中にその輪郭だけを作って現れる。声は下卑た笑い声が主であり、彼らのまともな言葉として伝わるものはなかった。
「まあでも……ん、これは転送の反応――」
ちょうど逃走者の二人と男を挟んだ間。そこがにわかに明るくなったかと思うと、光は膨張し、周囲一帯を瞬く間に眩く輝きで照らし始めた。
雨も、闇も。恐怖も不安も、その全てをかき消す、形容するならばまさに希望の光――その中から、一人の男が現れた。

「っと。ふう、病み上がりなのにひでぇよな……」
右眼の眼帯を装備(つけ)て、鼻筋を横切る深い傷痕が特徴的な、まだどこか幼さを残す青年。彼は野戦服姿で、肩から負紐(スリング)で狙撃銃を提げる彼はなんでもないようにそう呟いた。
そして不意に現れたのにも関わらず、その全てを理解しているかのように微笑んだ。
「話は聞いたぜ。特異点『エリックス・フィール』。お前を処分しに来た」
「は？　突然来て何言ってん――」
コッキングレバーを引いて弾薬を薬室に装填。
狙撃銃を構え、間もなく発砲。
静寂に響き渡る銃撃音は、寸分の狂いもなく、特異点ゆえにその特異能力で数多の人間を惨殺せしめ畏怖の象徴と成り得たその男の腹を、いとも容易く撃ちぬいた。
「ぐああっ？！　て、てめえっ！！」
脇腹を抑えながら跪く。男は先程とは打って変わった殺気ごもる視線を青年に向けるが、ソレ以上は何も起こらない。
特異能力を使用するには並々ならぬ集中力が要る。ソレは、どれほどの熟練者でも変わることはないが、熟練者ならばどのような極限の状態でもそれが可能であった。

未熟ならば言わずもがな、少しばかりの障害で、その”無敵”と自画自賛する能力でさえ使えない。
この男は、その後者だった。
「特異点は珍しい。お前を処分するのはオレだって心苦しいがな……協会の手先になったお前の運命はその時点で決した」
至近距離で狙撃銃の銃撃を受けた男は、それだけで致命傷となるから命も残り僅かだ。
だがさらに止めを刺すように、青年は弾丸を込め、引き金に触れた。
「死にたくなければ運命を覆せ。五秒なら待ってやる」
出血量からして五秒以上は、彼自身、集中が保てない。判断し言ってはみたが――。
喘ぐように呼吸し、やがて倒れこむ。睨むだけで、痛みに堪えるだけで意識がこの青年に集中することはなかった。
口から鮮血を吐き出し、最期に漏らした。
「た、助けてくれ……！」
「あの世で後悔するんだな」
発砲。
弾丸は鋭く額に叩きこまれ、頭蓋骨が砕ける。どろりとした脳髄が溢れてこぼれ、男の命はそこで絶えた。
青年はそれを見届ける。
背後の二人を一瞥もせず、ポケットから通信端末を取り出し、耳に押し当てた。
「時衛士（ときえいじ）だ。任務を遂行した」
『了解、転送を開始します』
「被害者の命はまだあるが、どうする？　手追い出し、ここまでされて機関に戻れるか心配だ」
『連れて帰るなら三〇秒以内に、彼らの許可をもらってくださいね？』
「わかった。じゃな」

『はい』
衛士は振り返り、座り込む二人へと向き直った。
「という訳だ」
説明など不要だろうというように彼はそう告げる。
同時に彼らも、それだけで意思疎通を果たすように頷いた。
「ありがとう、助かるよ」
「はは、本当(まじ)にな」
疲れきった顔で立ち上がり、よろよろと心もとない不安定な動作で手を伸ばす。握手を求める二人に衛士は応じて、やがて彼らを包む光があった。
――時衛士の覚醒は、この日からおよそ一週間程前にまで遡る。

## プロローグ　？

「エージ、寒くないの？」
制服姿の姉が、カップルよろしく腕を組んでそう尋ねた。
衛士は同様の制服を着て、同じ格好の生徒たちが歩んでいく道を共に歩きながら苦笑した。
「姉さんがそうしてくれるおかげでね」
かえって熱いくらいだ。
頬が、耳まで真っ赤になって熱を孕むのを覚えながら、それでも離れてくれず、あまつさえイタズラっぽく笑う彼女に、敵わないと諦めたのは少し前の話である。
「でも私ももう三年生だけど推薦で大学決まってるし、もっともっとエージで遊んじゃうよ？」
嫌らしい笑み。だけどなぜだか、それがひどく心地良かった。
いつまで経っても弟から離れられない姉。
どこまでもダラダラと続く坂道。見たことも、歩いたこともない道だったが、それを疑問に思うことはなかった。
「あんまダラけてると推薦取り消されんぞ」
「大丈夫よ。学校だと完璧だもん」
「家でも完璧にしといれくれよな」
嘆息混じりに告げてみる。
もうそろそろ、というか普通ならば交際相手の一人くらいいてもおかしくない年齢だ。
彼女の美貌があれば言い寄ってくれる男がいるだろう。そして友人の話だと、実際にそういった相手が出てくることは在るらしい。
が……ダメ……！
断られる……！
圧倒的謝罪っ……！
そもそも「ごめんなさい」と言うより、「無理」と切り捨てるら

しい所を聞くに好きな相手が居るのではないかと思ったが、それさえも無いらしい。
それを聞いて、少しだけ安心する自分に気づいたのは、墓場まで持っていく秘密である。
「よ、エイジ！」
「おはよう、エイジくん」
「おす、トキ！」
そんな頃合いにやってくるのは二人の男子学生と、一人の女子学生。高校生活で苦楽を共にする主なメンバーだ。
名前はそれぞれ――。
「おはよう、なんだよみんな揃って、珍しいじゃんか」
名前。
出てこいない。
いや、そもそも……顔をあわしているのに、衛士にはその顔が見えていなかった。
のっぺらぼうではなく、影がかかってその奥が見えない。ただ声だけが聞こえた。肩を叩けばそれがわかった。だがそれだけだ。あれほどに仲良く、あれほど楽しいヒビを過ごしたのに、顔もわからない。見えない。記憶に、無い。
それがきっかけになったのかもしれない。
鼓動が、妙に力強く耳に届いたような気がした。
「いやな、ちょうどさ――」
彼らの声が遠くなる。
自分だけが、孤立してしまったような、妙な感覚。
異変はそこから始まった。
体の周りに妙な膜が出来たような、白昼夢の中に迷い込んでしまったような不可思議な感覚。
そして――耳に劈く発砲音。
映画やドラマで聞く『バキューン』なんてものではない、パン、という簡単な破裂音じみたソレ。

それと同時に友人の一人が側頭部に穴を開けて、膝から崩れていった。
衛士はただそれを呆然と見る。姉は悲鳴を押し殺して衛士に抱きつき、残った二人は困惑し、悲鳴を上げながら頭を抱えた。
発砲音。
もう一人の友だちが、同様に頭に穴を開け、血を吹き出しながら倒れていく。
発砲音。
残った一人は胸を撃ち抜かれ、涙を流しながら最期に衛士を見て、口元を動かし、何かを言った。が、聞こえない。鮮明に聞こえる銃撃音、そして近づいてくる足音だけを聞いて、彼女の絶命を見守ることしか彼には出来なかった。
身体が動かなかったのだ。
『エージ！』
かろうじて聞こえた声は、まるで分厚い壁を通して届いているかのようだった。
――後頭部に鈍い衝撃を覚える。
何か硬いもので殴られたようで、視界が揺らぐ。膝の下が消えさってしまったかのように衛士は立ち続けることができなくなっていた。
為す術もなく倒れる。
その最中に見るのは、妙な男達に連れ去られていく、姉の姿だった。

心電図の反応が忙しない。
あれほど静かだった鼓動がここに来て激しくなっているのを見て、褐色白髪の女はただ困惑した。
医者を先ほど呼んだが、僅か一分一秒が長く感じられる。ここで、不意に反応が途切れてしまったら。そんなマイナスの想像が頭の中に染み付いてしまって、彼女はどうしようもなくソワソワと、歯を

かみしめて腕を組み、貧乏揺すりを押さえられずに彼の顔を注視した。
「落ち着けエミリア。こっちまで落ち着かんわ！」
時衛士が眠る寝台、その対面にはプロレスラー顔負けの巨躯を持つ老人が居た。白髪頭をオールバックにする、ただ居るだけで威厳溢れる彼はハーガイムと呼ばれる『特異点』だ。
つまりは、今二人に心配されている少年と同じ存在であり、世界抑圧機関の粋を集めた能力者である。
「こ、これが落ち着いていられるかッ！」
「黙れやかましい！　わたしにではなく、むしろだったらエイジに呼びかけてやれェッ！」
「だ、だがわた――」
エミリアの言葉をかき消すのは、心臓さえも圧迫するほどの凄まじい威圧だった。
ただの気配。そこから放たれるプレッシャー。目に見えないし、物理的なものですらないソレは、同様にハーガイムも感じたようだった。
身体が重くなるのを感じながら彼へと目を配ると、ハーガイムはただ頷いた。
「重力子がこの部屋……いや、エイジに集中している」
「重力子が？　アレは、重力を司る素子だろう？」
「同時に特異能力を使用するために切って離せないものでもある」
重力子は機関が時間操作のために、それを制御する装置を作ったのがきっかけでその存在が解明された。
そして特異点とは、その重力子を肉体に備えて、重力子を制御する能力を持った個体の事である。そこから本能が、その個体の本質的な部分を呼び起こして重力操作、そして特異能力を呼び出し扱う。その過程を無意識に行えるのが特異点だ。
だから、重力子自体が個人にそれほど集中することはない。
それこそ、周囲の人間に、重力異常が感じられるほどに。

「つまり、これは……」
「ああ、機関はとんでもないものを拾ってきたということになるな」
この現状から考えられることは、時衛士の持つ特異能力がより強力になるという事。あるいは変質し、全く異なる能力を有することになること。あるいは、肉体が堪え切れなくなる事だが――彼の肉体、主に負担となる心臓は生憎にも半分機械だ。それ故に、後者の危惧が実現することが無い。
となれば考えられるのは、特異点としてさらに成長して、敵にも、味方にとっても脅威となりうる存在になるという事だった。
重力が二倍になってしまったのかと言うほどに身体が重くなる。
立っていられない程というわけではないが、戦闘機のパイロットの気持ちが今なら良くわかった。
その異常なまでの集中が一際強くなった時、まるで地球の束縛が消え失せた。
そう思えるほどに、今度は身体が軽くなった。
空中に浮いているのではないかと錯覚するほどの身軽さ。不意過ぎる現象。忙しない異変。
だがそれを良く味わう暇など、エミリアには無かった。
――時衛士の目が開いた。
口を開けて呼吸して、瞳がゆっくりと病室を見回していた。
思わず叫びそうになるのを抑えて、彼女は大きく息を吸い込んだ。
「ようやく目覚めたか。この寝坊助が」

姉がひん剥かれて輪姦(まわ)されて、四肢を切断されて首を投げられた。
胸糞悪くなる、また死にたくなるほどの光景を、永遠と思われるほどの時間、ずっと見ていた。目を瞑ろうとも瞼が言うことを聞かず、身体が動かない。まるで背中におもりでも乗せられているかのようだったが――。
気がつけば白い色を見ていた。
否、それは色だけではない。蛍光灯や、目立たない模様がある。

天井だった。
叫びだしたくなる。
唇が震えて、開いて、糸を引くのを理解しながら、喉の奥からせり上がる悲鳴が、もうあと少しで吐き出される。
「ようやく目覚めたか。この寝坊助が」
それを遮ったのは、エミリアのそんな言葉だった。
胸の中で蠢いていた悪感が少しだけ和らぐ。目だけを動かして声のする方を見れば、白髪で片目を隠しているものの、残った目が充血していることが良くわかった。
「……オレは、どれくらい寝ていたんだ？」
「一ヶ月ちょいだ」
ハーガイムが答えた。またそちらに目を向ければ、今度はいつもと変わらぬ還暦過ぎの、だが年齢より遙かに若く見える老人の姿があった。
「一ヶ月か。筋力衰えてるな、たぶん」
「安心しろエイジ、お前の為のトレーニングは既に考えてある。だろう、ハーガイム？」
「ああ、時間が許す限りお前を鍛える。その準備は万全だ」
「そうか。良かった」
そう、良かった。
これでまた元に戻れる。否、戻っただけではダメだ。もっと先、誰も敵わぬくらいにもっと強く。
あの悲劇を繰り返してはいけない。
あの惨劇を許してはいけない。
復讐だ。
恨みが恨みを呼んでもいい。惨劇が惨劇を繰り返してもいい。
元々はこの私情のためにこの機関に来たんだ。
奴らを、協会を潰す。この生命に変えても。
――衛士は半身を起こす。ともに一切の痛みや障害が無いことを確認してから、四肢、そして胸にいくつも付けられる電極を引き剥

がして床に捨てた。
寝台から降りて久しぶりに立ち上がる。ただ降りて立つだけでよろけてしまう己に、それだけの衰弱や衰えを覚えながら、点滴針を引きぬいた。
「ハーガイムさん、今から頼めるか？」
「今から？　無理だ、医者に見てもらわないと……」
「点滴に心電図。もっと具合が悪いならこれだけじゃ済まない筈だ。なら残るのはただの確認。今のオレにはそれすら惜しいんだ」
「おい、エイジお前……」
その背後でエミリアが口を挟む。が、それを制するのはハーガイムだった。
言っても無駄だと首を振る。エミリアはそれで理解し、肩を落とした。
「好きにしろ」
「ごめんなさい、エミリアさん」
「いや、いい。起きてくれただけで、それだけでな」
振り返らずに衛士は言って、
「なら来い、時衛士。だが少しでも異変があれば迷わず病院に搬送するからな」
「構いません」
強い意思を持つ眼光。
まるでどこかで決意をしてきたかのような、迷いのない瞳。そして今までの時衛士とは違う妙な違和感。
別人のような彼は、それでもあの少年としてハーガイムを見つめる。
かくして、殆ど寝起きで訓練が開始して――。

ハーガイム曰く”地獄の一週間”が経過し、現在に至る。
時衛士はさしたる事情も知らずに特異点を始末して尚、その被害者二人を連れ帰るという、ごく難易度の高い任務を僅か数分で片付

けるという偉業を成し遂げて、機関にてようやく”復活”した。

## 蝕む闇

「他に仕事は無いのか？」

連れ帰った二人の被害者のために病院の手配を機関に任せて、衛士は帰ってきたばかりだというのにそう急かしていた。

世界を掌握しようとする機関。

純粋にそれを妨害する協会。

それらの行動が活発化するのを肌に感じているのか、それとも単に彼自身が高ぶっているのかは分からないが、その一面は今まで彼には無かったものだった。

飽くまで八方美人に生きてきた彼だし、それが時衛士の処世術だと思っていた。

この機関の技術全てを支える、開発技術部部長のアイリンは、その長い赤毛を掻き上げながら彼へと向き直る。

「少し休みなさい。いくらなんでも、君が疲れに気づいてなくてもコレ以上の活動は危険よ」

一週間の訓練は、一日十八時間の、それこそ肉体を破壊する勢いで行われた特訓だった。全力を尽くすアスレチックワールドに、ハーガイムとの組手。そして狙撃訓練に、精神訓練。模擬訓練。それらを一日で消化し、六時間の休憩の後にまた繰り返す。悪夢のような時間だ。

だというのに、時衛士はそれをやりこなした。

いくら心臓が人工的なものだとはいえ、精神的にも、そして単純に肉体的にも堪え切れぬはずの運動量だったはずだ。ハーガイムだって組手の時点で音を上げると思ったからこそ、無茶に無茶を重ねたメニューを組み立てたのだ。

少し弱音を吐けば、鬼軍曹の暴言をまき散らしながらも少しだけ軽減するつもりだった。だというのに彼はこの一週間を乗り越えて――大した休憩もないまま、その裏切り者の抹殺任務に就いていた。

疲れなど知らない子供のようだ。それまで眠っていた一ヶ月を取り返すような働きは凄まじいほどだったが、そう思うと同時に、酷く心配だった。
まるで死にに急いでいる。
彼女には、そう思えて仕方がなかった。
「オレの身体はオレがよく知っている。もっとオレを任務につかせてくれ！」
「あーうっさい。貴方に出来る任務はもう無いの。おとなしく自宅で待機してなさい」
「だからオレは――」
「いい加減になさいッ！」
アイリンが叫ぶ。研究室で、それぞれパソコンに向かっていた研究員が総じてその動きを止めた。
空間が、不意に静まり返る。彼女は立ち上がり、呆然とする衛士へと対峙した。
「貴方自身が疲れを知らなくたってね、疲労は肉体に蓄積されていくものよ。休憩を置かなければなおさらで、増加する一方。いつ倒れてもおかしくなくなる。今は疲れてないって思ってるでしょ？それはね、エンドルフィンっていう脳内麻薬がごまかしてるだけなのよ。そんなに任務が欲しいのなら命令してあげるわ。休憩なさい。それが今の貴方の任務よ！」
「くっ……！」
「貴方はもう、貴方一人だけの命じゃない。機関に道具として使われてるけれど、貴方を信頼する人もたくさんいるわ。その人達のために、少しだけでもいいから自分を大切になさい。いいわね？」
「わかったよ。休めばいいんだろ」
「全然わかってないみたいだけど、そのとおりよ」
「任務が決まり次第呼んでくれ」
「わかったわ。出来る限り早く見つけておく」
狙撃銃を負紐で肩から下げたまま、彼は研究施設を後にする。

彼女はその姿を、背中を見送りながら、妙な感覚を胸に渦巻かせていた。
――これほどまで叫んだのは久しぶりだった。それと同時に、自分の事以外をこれほどまでに想ったのも随分と久しぶりだった。
そして、またその想いが届かないやるせなさ、切なさを感じるのも懐かしいと思える程だった。
いや、もしかすると初めてかもしれない。昔に呼んだ小説を、自分の限りなく薄い過去の思い出を、それで埋めているが為だろう。
少しだけ虚しくなるが、それで分かった。
どうやら、時衛士を利用している間に、自分自身も随分感情移入してしまったようだ、ということに。

少年は荒れていた。
どうしようもなく胸の中で渦巻く負の感情が行き場をなくしていた。
殺戮衝動は無いが、その感情をぶち撒ける為の手段としてそれが選ばれるのに、そう時間はかからなかった。
目覚めてから芽生えていたその想い。それまでは己を壊す程の運動量で耐え忍んできた。これが終われば恨みを返せるからと自分で自分を励ましてきた。寝ても悪夢で心が休まらず、その悪夢での怒りを糧にして身体を動かした。
そしてようやく、自分と同じ”運命に選ばれた”特異点が裏切り行為をしたという事で殺してきたが――たったそれだけで、彼が満たされるはずがない。
もっと殺さなければいけない。
姉の仇だ。家族の仇だ。
殲滅しろ。抹殺しろ。
心の闇でもなんでもない、時衛士の理性がそう囁いていた。
自分を保つためにすべきこと。しなければならないこと。
長い眠りから覚めて、まともに合っていない知り合いが多かった

が、今ではもう気にならなかった。
どうでもいい。
仕事が決まるまで、あの悪夢を見続けるだけだ。
「え、エイジさん！」
人波を無意識にかき分けて自宅へと向かう。
その中で、彼の名を呼ぶ声があった。背後から、その気配と共に近づいてくるソレに覚えはあった。
ミシェル。彼女の名前は確かそうだった。
「エイジさん、帰宅中ですか？」
彼女はそう多くもない人を避けて、やがて彼の隣に並ぶ。自然に、距離を縮めて手と手が触れ合う距離に近づいた。
それから顔を見て――くっきりと浮かび上がる目の下のクマを、そしてげっそりとコケた頬を、青白い顔を見て思わず息を飲んだ。
彼は時衛士。間違いなく、記憶と合致する同一人物だ。
だが今隣に居るその時衛士は一体誰なのだろうか。妙な疑問が浮かぶほど、彼の姿は別人のようになっていた。
「ああ。命令だからな」
そっけない、無骨な返答。愛嬌も熱すら一切ない、事務的な言葉だ。
「な、なら一緒に帰りませんか？　私、部屋隣なんですよ」
「ああ、そうだな」
それでもミシェルは言葉を続けた。
アイリンに言われたからではないが、今の彼を見れば誰だって心配になる。
それまであったにわかな下心なんかは既に消え失せていて、今ではすっかり、帰ったら栄養のつくものをたくさん食べさせなくちゃ、だなんて事を考えていた。
虚空を見つめて、ただの一瞥すらしない少年。微笑を忘れた、機械のような顔。
平凡な少年は平凡な人生を崩壊させられ、絶望し、力を得てまた

新たな人生を歩み始めた。だがこの間の死をきっかけにし、彼は殺(キリ)戮機械(ングマシーン)に生まれ変わってしまったようだった。
これがもしマンガや小説ならば、心を与える事でより強くなり、人間的にも成長する。ミシェルは、彼ならばそうなると確信していた。
だが、心とはなんだ。どうやって心を与えれば良いのだろうか。
ただ人の暖かさを教えればいいのか。抱きしめれば、愛を伝えればいいのだろうか。
わからない。わかるはずもない。
時衛士の中にある途方も無い絶望という深淵を埋める程の物を、その深さを知る術も、同調するための経験すらも彼女は持ちあわせては居ないのだから。
「ねえ、エイジさん……」
声を掛けても返事がない。
促す所作も無い。
彼女は続ける。
「私と初めて会った時の事、覚えてますか？」
「ああ」
反応。
無視ではなかった。
それだけでも嬉しくなる自分がすこし情けなくなりながらも、繋ぎ止めるように頷き、言葉を繋げる。
「あの時のエイジさん、ずっと私の胸ばかり見てましたよね？　平然としてたけど、すごい恥ずかしかったんですよ？」
「そうか」
「そうですよ。それでエイジさん、あれからずっと頑張って来ましたよね。そのお陰で、機関(ここ)の雰囲気も随分変わって来ました。付焼(スケアク)刃(ロウ)っていう能力者がすごく強くて、機関でもどうしようってなってたのに、エイジさんはそれでも構わず戦って……」
「そういった任務だ。オレはせめて任務は達成する」

「でも中々できませんよ。自分より強いってわかってる敵を相手にするなんて」
そして思い出す。
彼の健闘。負傷。勝利。敗北。そして――死。
それらがあって初めて今の彼がある。
それが良いことなのかは分からない。だがその過去が一つでも失われては、彼は彼でなくなる。
ミシェルは思いながら、そっと彼の手を握った。
何気なく甲に触れたのをきっかけに、一方的に繋いだ手。力を握ってもソレは帰って来なかったが、拒否されるとばかり思っていたから、それは大きな一歩だった。
彼の体温が伝わってくる。脈拍が、その手の感触がよくわかる。
「あの時みたいに添い寝、しましょうか？」

――甘く、優しい囁き。
野戦服越しに伝わる体温。柔らかさ。
髪からただよう石鹸の香り。
そして蘇る記憶は――大切な人を失った、あの瞬間のソレだった。
「く、うううッ……！！」
あの連中の顔が蘇る。
この間、その協会（なか）の一人が死んだ。
だがまだ、ザコのクセに粋がるクソ共が四九人残っている。あの数だけいて、それでも少年がそれぞれの顔を忘れたことはなかった。
記憶力が凄まじいという事もそうだが、それよりも何よりもそうさせるのが執念だ。
忘れてはいけない。復讐（それ）が達成されるまで、決して。
頭を抱えて立ち止まる衛士は、そのどうしようもなく溢れてくる力を必死に抑えていた。
今少しでも気を抜けば関係ない人間を殺してしまう。
もしそうしてしまえば、自分の中の大切な、唯一残っている大切

な何かが壊れてしまう気がした。
だから抑えなければならない。
跪き、額を地面に擦り付ける。
周囲の人間が彼らを避けながら、遠目にクスクス囁き笑い、不快感を催していた。
「クソ……ぐぅううっ！」
目をつぶれば、奴らの顔が脳裏によぎる。
堪え切れない。
衛士は腕を振り上げる。ミシェルが必死に名前を呼んでいるが、それに応える余裕はない。
「あああああっ！」
振り下ろす。
大地を叩く拳骨。骨に衝撃が直接伝わってきて、腕が痺れた。
遠慮のない打撃に皮膚が裂け、拳に血がにじむ。だというのに痛みは鈍感で、彼は渾身を込めた筈なのに傷ひとつつかない地面にイラついた。
「くそ、くそ、くそぉぉぉっ！！」
何度も、何度も地面を殴る。叩く。打ちのめす。
傷つくのは一方的に自分だけだというのが分かっているのに、どうしてもそれを止められなかった。
――狂っている。
自分でもよくわかる。
――何かが壊れてしまったようだ。
それは随分と前の話だ。
ただ、未熟だった自分はそれを誤魔化して気付かないふりをしただけ。
今は無防備故に、直接つきつけられたそれを真に受けて、本来すべきだった行動に移っているだけだ。
協会（てき）を殺す。
それが最優先事項であり、それ以下は全て切り捨て。

復讐こそが今の彼の全てであり、最後の役目となりうるものだった。

――果たして自傷行為は、彼の意識が途絶えるまで行われた。
だが傷は思ったよりも軽傷に済んでいた。それは残った理性が力にリミッターをかけた為だろう。
少年はそれから丸々二日、四十八時間の眠りにつく。
機関は、そんな少年のあまりに自暴自棄すぎる行いにやや雰囲気を暗がりに落としたが……。
そこでアイリンはまるで誘われるように発見した。
ただの一般人――とはいえ、傭兵だ――が、付焼刃（スケアクロウ）を相手にしたという情報を。
そして個人だというのに一方的な戦闘でソレを終わらせたという事を。
新たな出会い。
それが何を起こすか分からない。
だが、この状況を打破するためにはなくてはならないものだと、彼女の直感はそう告げていてた。

## 対話

「傭兵？　ＰＭＣか？」

仕事の時と、眠る時と、起きた時と変わらぬ迷彩服姿で、時衛士はアイリンの前に居た。

施設内の食堂で、皆が昼食をとっている風景に溶け込んで話し合う。それぞれの前には空になった丼がひとつずつ。食後の歓談だが、両者にとってはそれが本題だった。

――服装にも気を使わなくなった。ミシェルのお陰でいくらか血色が良くなっているが、それだけが唯一の救いだろう。あとは単純に、筋力などの身体能力は変わっていないのに強くなったように思う。

迷いがなくなったというのだろうか。

そして慣れだ。

自分の戦い方に、自分の能力を上手く組み込めてある。彼の能力は予知であり、それは常に彼の脳みそに”未来の情報”を与え続けているのだ。それと同時に、現在進行中の情報を得る。二つのそれらを処理して尚利用する。一時的ならばいくらでもできるが、これが死ぬまで続くとなれば頭が痛くなる話だ。アイリンはイメージして思わず頭を抱える。

「どうした」

「いえ、なんでもないわ。そう、傭兵の話だったわね。彼はＰＭＣじゃないし、そういった会社や組織に属していない。個人でどちらかについて、働いて、報酬を得て、またどこかへ行く。そんな生活を繰り返しているみたい」

「命知らずの変人だな。戦闘で飯を食うなら集団のほうがまだ安全なのに」

「貴方が言える立場じゃないでしょ？」

知るか、と捨てるように衛士はコップの水を煽るように飲み干し

た。
やはり以前より変わっている。アイリンは改めてそう思う。
何よりも思いやりや、気遣いや、他者に向けるそういったものが一切なくなったのだ。
少し寂しい気がした。
いや、この衛士不在の二日間で再認識した感情は、そんなしおらしくいい年して乙女チックなものではなかった。
少しつまらなくなった、というのが正確であることを理解したのはついこの間で、その事に虚しさを覚えた時などは寝込みたくなるほど落ち込んだ。
「ところで、さっきの食事の味はどうだった？」
話を変えてみる。
重要な話は確かに続けるほうが良いが、確かめて置きたいことがあるから食事に誘ったのだ。外食なんて柄じゃないから食堂での食事だが、別にあこがれの男性と、というわけではないのだ。気にする必要など無い。
「……普通だ。いつもの牛丼の味だった」
疑問に首を傾げるが、それでも衛士は不意の問いに何かを察したらしい。
彼は親切にそこから続けた。
「アイリンさんはいつもの、白い肌に、赤い髪でいつも通りに見えるし、認知機能がどうかしたという変化は無い。安心してくれ」
「そう。なら良かったけど」
「オレが変わったように見えるんだろうが、これが本来のオレだ。繰り返すようだが……」
「いいわ。耳にたこができるくらい聞いた話は」
「そうか」
感慨もなく、残念そうでもなく、彼は頷いた。
「貴方、誕生日はいつだったかしら？」
「誕生日？　……二月の……、中旬だ」

何か考えがあって訊いたのであろうアイリンに答えてやる。が、月は思い出せても正確な日数が思い出せない。十日だった気もするし、よく考えれば二十日だった気もする。間を取って、なんて誕生日を教えるにあたって明らかにおかしい返答だ。
「そう。じゃあ貴方は当分十七歳なわけね」
「そうだ」
「仮に、貴方が眠っていた時間が一ヶ月じゃなくて、一年や二年だったらどうする？」
「どうもしない」
一拍もおかず、彼は即答した。
「協会が動いていないならオレは潰すだけだし、機関がまだ機関として存在しているなら働くだけだ。どれだけ時が経とうとも、状況が変わらなければオレの役目も変わらない」
その通りだ、と勢いで質問したアイリンが頷いた。
それで、と衛士が問う。その後の言葉はないが、本題のことを指しているのだということは良くわかった。
それが今の”彼らしさ”ならば、もはやなにも言うまい。
「ごめんなさい。話を戻すわ」
その傭兵、『レックス・アームストロング』の情報は割と簡単に手に入った。
彼はアメリカ人で、アメリカで生まれ育つ。ハイスクールを卒業した後海兵隊に入隊し、その後一等兵として様々な紛争に参加する。趣味の狩猟が良い方向に活躍し、その周囲への注意力や警戒、反応、判断はすこぶる調子で成長し、九ヶ月目、上等兵へ昇進する前に除隊。
理由は一般市民の殺害による現行犯逮捕。その後留置所から脱走し、行方不明に。
その後様々な民間軍事会社を転々としながら、一時期はフランス外人部隊に身を置いたこともあった。が、今では個人活動の傭兵だ。そして名もある程度広がるほどに有名で、有能な傭兵だ。

傭兵という稼業はただの筋肉馬鹿では務まらない仕事だ。
あらゆる環境に適応し、あらゆる作戦を随時状況により変更して、そして無駄なく行動し限りなく自分に利己的でなければ生きていけない。ある種の野性味を、そして野生で生きるすべての知恵を持たなければならない仕事だ。つまり、普通の頭の出来でここまで名を広める事は殆ど不可能と言えよう。
そして普通の頭の出来で、超能力なんてモノを使用する敵を撃破することはできないはずだ。
初見殺し。生き残っても、追い打ちを掛けられるだろう。
だが、付焼刃（スケアクロウ）という存在を初めて知っても尚生き残った例外は機関にも居た。
それは目の前の少年だ。
その能力は風を起こして弾丸を弾く程度のものだったが、それだけでも十分に脅威になり得たはずだった。だが彼は生きている。あまつさえ、その敵を皆殺しにしていた。
その点は似ている。
秘めたる才能というのだろうか。アイリンにはよく分からないが、直感的にそう思った。
「能力持ちではないんだろう？」
「ええ。現在観測した限りではその様子はないわ。それに、仮に能力を持っているとしたら特異点以外に考えられないし。付焼刃は、協会の特別な施術があって初めて能力が使えるっていうのは、知ってたかしら？」
「どうでもいい」
それは質問に対する答えではなかった。
どうでもいい。たしかにその通りだ。どのみち殺す相手だ。特殊な能力を持っていたとしても、それはただ殺害の障害になるだけ。どうやって力を手に入れた過程なんて関係ないし、幼子が居るから見逃してくれ、なんて命乞いも彼には通じないだろう。
だからなんだ、と切り捨てられるに百万でも一千万でも賭けられ

た。
「それで？　オレはそのレックス・アームストロングをどうすればいい。聞く限りじゃ敵にも味方にもなるんだろう？　殺すのか。そうやって何でも殺せばいいと思って。無害な人間に、オレは手を出さないぞ」
「でも彼が協会側に回ったら？」
「殺すさ。何を言っているんです」
「……貴方、もしかしてふざけてない？」
言われて、嘲笑じみた笑いを漏らした。蔑む形でも、見下す形でも、彼の口角が上がるのを見たのは久しぶりのことだった。
「一応まとめておこう。オレは協会の人間以外殺さない。それだけだ」
「じゃあ無関係な人を殺さざるを得ない状況になったら？」
「より協会の人間を逃さないように殺して、殺す」
「……なんだか貴方と話してると気分が滅入るわ」
「殺すだの殺さないだのの話しかしないからでしょう？」
不安定に、彼は思い出したように敬語を口にする。
アイリンは肩をすくめて話題を転換した。
「オレだって、突然こんな本能的な部分しか考えられなくて混乱したが、今ではようやく慣れてきた。大丈夫だ。ユーモア豊かに会話できる」
それこそが冗談なのではないかと思えてしまうのが、悲しいところだった。
アイリンはコップの水を口に、喉を少しだけ潤してから言葉を返した。
「なら仕事以外の事を考えられるかしら？」
「くっ……！」
「出来れば詰まらない欲しいんだけどねぇ」
妙な事で落胆するように彼はうつむいた。
つまらないというのは訂正しよう。少しは面白いかもしれない。

アイリンはまたいつものような微笑みを取り戻して、彼の傾向も随分とわかったことだし、と重い腰を持ち上げた。
「ねえ、貴方のもつ予知って能力は――」
食い気味に、というよりは殆ど遮るように衛士は言った。
内容すら述べていないその台詞に対して、ごく正確に。
「アイリンさんが”言った”という未来を知りながら、オレはアイリンさんが何も”言っていない”現在を過ごすだけです。ですが基本的に予知できるのは確実に起こる事です。今述べた仮定は決してありえません」
彼女が尋ねようとしたこと。
ソレは、アイリンが訊ねるという事が決定した未来を予知した瞬間に、それを反故にして何も口にしなかった場合はどうなるか、ということである。
そしてその返答は彼が言ったとおりである。
予知は予測ではない。時系列的に起こっていないことを知る能力ではあるが、彼の能力に至ってはより確実性が高まるソレだ。己の行動については少し”融通”が利くらしいが、他者の場合はありえないらしい。
つまり、起こる事を予知したら、その起こる事は確実に起こるのである。他者の意思でそれを覆すことはできないが、その起こるという未来を、運命を変えられるのは予知が出来る人間のみ。つまりはこの少年だ。
「それで、貴方は目覚めてからその能力に異変はないのかしら」
死を垣間見た人間の性格が変わることは、割と一般的かもしれない。
そしてまた、一度死を見た人間の力、特にそういった本来持たざる超常的な特異能力は特に強化される傾向（きらい）がある。
彼ならそれが顕著であるはずだ。彼女はそう信じていた。
「ありませんよ。予知に遠隔視、透視……他に増えたら、いい加減オレの頭では処理しきれなくなりまし」

「予知の時間は？」
「五秒間の未来です」
「遠隔視の範囲は」
「オレを中心に上下左右半径十メートルほど」
「透視は」
「特に。変わらずオレが透視したものは透過したものとして干渉できるようですが」
返答全てに虚偽を放つ衛士は、それでもしれっとした態度で、テーブルの上で指を絡めるように組んで、アイリンを見据えていた。
満足か？　とでも言いたげな表情は、先ほどの少しばかり軽くなった雰囲気を再び重くしてくれる。まったくもって忙しい奴だと言ってやりたい気分だったが、彼女の理性がそれを飲み込ませた。
予知は五分先の未来。
遠隔視は上空、雲の中までだからおよそ五キロ前後だ。
だから、この地下空間（ジオフロント）に居ながらも地上を見ることが出来た。必要がないから滅多には使わないし、負担が高く、変わらず集中の限界は五分で来た。だからソレが可能な右眼はいつでも眼帯で、適当で簡単に封印してある。
唯一真実に近いのは透視だ。
今までは透視は念じることによって遠隔視と切り替えられた。まるでゲームの、サブウェポンのようだと思ったが――今では全ての眼、その能力に干渉した。
遠隔視が使えない代わりに透視をする。それが今までだったが、今では透視を使いながら遠隔視が使える。
使い方は様々で、使いこなすにしても衛士自身に強い疲労をもたらすものばかりだった。
アイリンが嘘を見抜いているかは知らない。だがそれがどうであれ、関係のない話だった。
彼女は立ち上がったまま、捨て台詞のように言った。
「任務の説明は明日するわ。今日はありがとう。帰って休みなさい」

## 任務：傭兵『レックス・アームストロング』と交渉せよ

十二月十二日。
時衛士はロシアの首都モスクワに転送（とば）された。
任務の為である。その内容は、例の傭兵と接触し、交渉して引き入れる、あるいは協力体制を構築（つく）ること。
黒いハイネックの上に白のトレンチコートを着こむ彼は、さらにギターケースを背負っている。中には簡単に分解されたＭ７００と呼ばれる狙撃銃と、無数の弾薬。コートに内装されるホルスターには９ｍｍ拳銃だ。
装備はそれだけで、彼は着の身着のままここに来ている。ひとまず長居をするつもりはないから日本円にして十万円ほどを持ってきたが、ソレ以外の荷物は装備だけである。
「寒ぃな……」
今日は協会の殲滅任務ではない。それゆえに少しばかり気怠さがあったが、今ではそれも気にならない。
途方もなく幅広い道。そこは常に濡れて、濃いグレーに染まる。それ以外の地面には雪がつもり、往来はみな頬や鼻頭を赤くして居る者ばかりだが、本格的な防寒具ばかりを身につけていることに驚くと同時に、やはりな、と納得した。
毛皮のコートに、耳までを覆う帽子を被る面々。いくら昼日中とはいえ、いくら日が出ているとはいえ、東京十二月の早朝より遙かに寒い。やはり慣れなのか、と衛士は思う。
「しかしまあ、平和だな」
ロシアは治安が悪いと思っていた。少なくとも下手に行動すれば日本より物騒な場所ではあるかもしれないが、それでも早々人柄の悪そうな男達に絡まれることはなさそうだった。
歩いていると、彼は自然的に『赤の広場』に来ていた。
途方もなく広大な広場だ。円形に広がるのではなく北西から南東

に長く広がる。大聖堂や塔などが遠目に見える世界遺産の一つ。仕事ついでに観光も、と考えていたが、やはりこういった景色は良いものだ。
衛士は頷きながらも、いい加減寒さに堪えてきた。頭が冷えて耳が痛い。ブーツのお陰で足はまだ平気だが、このまま外に居たらまるで雪山に遭難した気分になってしまう。
そもそも、傭兵のような人間がこんな広場（ところ）に居るのだろうか。
観光か、地元住民か。割合に広場には多くの人間が居るが、その中には青い都市迷彩を着る警備兵なのか、軍人なのかよく分からない連中が散っていた。
下手に関わるとまた面倒そうだ。
彼はそう考えて、足早にそこを後にする。

衛士は手のひらサイズの通信端末、携帯電話のようなそれを捜査し、回線を繋げる。
通信衛星を介して行われる地下空間（ジオフロント）に繋がるが、都内で友人に電話をする程に快適な通話を楽しめる。これも全て機関の技術力の賜物だ。
「こちら時衛士、今、大丈夫か？」
『いつでも大丈夫です。後方支援（バックアップ）は任せてください』
ミシェルはあれから、専属のオペレーターになっていた。
元々前線には出ず、機関にこもって通信援助やら何やらが主な業務内容だった彼女である。衛士の専属になったことで、下手に休みをとることも出来ずに疲弊が募る。あまり負担をさせずに速やかに帰還するのが、今回の目的でもあった。
「例の目標が何処に潜んでいるかわかるか？」
『いえ……中肉中背で黒髪、赤眼で、それ以外で特に目立った外見的特徴はありません。ただ、モスクワに居るという事は間違いないようです。エイジさんなら、あるいは向こうがエイジさんの雰囲気を感じて近づいてくるかもしれません』

「類友ってやつか。しかし共通点なんてカケラも無いだろうに、期待薄だな」
『傭兵といっても、現在ロシアでの仕事はあまりありません。東のほうから来たところを見るに、恐らく北欧あるいは東欧の移動中かもしれません』
「なるほど。ならここで宿をとっているかもしれないって訳か」
外で待ち伏せていたほうがいいだろうが、それは自殺行為だ。寒さに慣れていないのに、何の対策も無しに夜を明かしでもしてみれば、翌朝には冷たくなっていることうけ合いである。
しかし――この広大な街で、特別目立った様子もない格好の男一人を探すなんて、無謀だと改めて思った。
「まあ、虱潰しでもしてみる。じゃあ、またな」
『はいっ！　が、がんばってくださいね』
「おう」
通信が切れる。
衛士は端末をポケットに入れると、近場の外套を背にして立って、あたりを見渡した。
地元民が楽しげに話しながら歩いていたり、あるいは犬を散歩している婦人や男性なども居る。スキットルを口に運びウィスキーを煽る中年男性は、日常風景のように紛れ込んでいる。が、それは確かに紛れも無く日常風景なのだろう。確かにこう寒くては、体温を上げなければ寒くて仕方が無いものだ。
白く染まる息を吐き捨てながら、少しだけ呆然とする。
手がかりの無い探し人がこれほどまで面倒だとは思わなかった。
「おう兄ちゃん」
そんな折に声をかけてきた男が居た。
声の方に首を回すと、隣に立つのは頭が白くなり始める年齢の老人だった。コートを着て襟を立てる、どこにでも居そうな男である。
「ギター弾けるのか？」
「あ、いや。これ預かり物なんで、手をつけられなくて」

「模範的な回答だな。下手に弦が切れてるだの弾けないだのと答えていれば、そのケースの中身を見せろだの貸してみろだの言われる可能性が生まれるからな」
「……ちょっと、何言ってるかわかんないっすね」
飽くまで老人の目を見て首を傾げて、最近の若者らしく彼を嘲笑するように言ってみる。
「はっ」
が、彼はそれを一笑。
突き詰めるように大きな一歩で歩み寄った。
「まだ若く見えるが、キミは軍人だろう？　潜入し単独行動で何かをしでかしにきた日本人だ。日本人に限ってこういう事は無いと思っていたがね」
「いや、軍人じゃないですよ。まだ十七ですし。日本は自衛隊しかないですし」
「聞いたことがある。軍とは何が違うんだ？」
「単純に防衛を目的とした組織ってだけです」
「そういうものか。ならキミがその自衛隊員であったとするならば説明がつかないな。だが銃を持ち歩いているキミは何者だ？」
「ら、ライセンスを申請していますので」
「ヤケになるな。何もキミを警察に突き出そうとか、そういう訳じゃない。ただ純粋に、ボクに危害を加える敵かな、と思っただけさ」
口調は、まるでバラバラのトランプを整えていくように丁寧になっていく。老人の背筋は、徐々にすっと伸びてやがて目線が同じ高さになった。
「何か探しものかい？」
最終的に、声は穏やかに、若者のソレになる。
変装しているのだと衛士はそこで気がついた。
顔にはシリコンマスクを、恐らく白髪が混じる髪はウィッグかスプレーだろう。なかなか手の込んだ格好だ。探偵か何かなのだろうか。

「ええ、ちょっと人を。あんたは地元の人？」
「いや、ボクはちょっと観光にね。ホテルをとって、今日はそろそろ帰ろうかと。思いの外寒くてね」
「ですよね。いや、日本人に堪えますよ。コート着てもすげぇ寒いんですから」
「ボクはアメリカだからね。十分共感できるよ」
身を抱くように彼は身震いしてみせる。
衛士はそれに軽く笑ってやると、彼は手を伸ばしてきた。
「キミは良い人そうだ。街に居る間でも仲良くしてくれると嬉しい。後二、三日くらいしか居ないしね」
手を返し、握る。軽い握手を交わしながら衛士は言葉を返した。
「ああ、そっちさえ良ければ。でも、世界一周旅行中か何かスか？」
「ま、似たようなものかな……と、もう気づいてると思うけど、この顔マスクなんだよね」
言いながら、男は上向いて顎の皮膚を指でこすり始めた。すると皮膚らしきモノがべろりとめくれ、彼はそこに指を強引に潜りこませるように摘む。引っ張り上げて掴むと、そのままシリコンを顔面から引き剥がしていく。
毛髪は果たしてウィッグだった。
シリコンマスクと一緒になる髪の下には、闇のように黒いソレがあらわになる。灰色の瞳の下には、燃えるような紅い瞳があった。
まだ若い男の顔、その頬には擦り傷のような薄い傷痕があるだけの、優男風味の甘いマスクだが、嫌味にならない、好感の持てる顔だった。
衛士の息がにわかに詰まる。
その刹那に、男はコートを翻したと思うと即座に内ポケットからナイフを抜いた。
深く踏み込み、折り曲げた人差し指を喉仏に押し付けるようにして刃を首に突きつける。
男の眼光は、先ほどの穏やかなものとは一転していた。

「どうした、ボクの顔に何か見覚えがあるのかい？」
――レックス・アームストロングは、衛士のほんの僅かな動揺を見逃さなかった。
それは恐らく、あまりに小さすぎるものの、疑念、疑惑として最初から存在していたものなのだろう。だからソレを確信に変えるためにわざわざ接触したのだ。そしてなかなか化けの皮を剥がさない衛士に、最終手段として顔を見せた。
反射的にコートの下に腕を忍ばせたが間に合わない。死ぬ前に拳銃で仕留められるかもしれないが、首を切り裂かれた時点で死が決定する。
選択肢は全てが潰えていた。
もういい、そもそも探す手間が省けただけだ。隠す必要は一切ない。ここで心証を悪くする意味はないのだ。
「レックス・アームストロング、オレはあんたを探していた……！」
「キミは何者だ。まず名乗れ。ボクをどこまで知っているんだ？」
「あ、ああ……オレは時衛士。世界抑圧機関から来た。あんたは大変有能な傭兵だということくらいしか知らん」
「世界抑圧……？　なにか、マンガか何かに出てきそうだ。冗談か、と言いたいところだがな。ボクに襲いかかってきた”妙な連中”が口にしていたのに覚えがある。機関がどうのこうのって言っていた」
何やら納得したようにレックスは唸るが、それでも首に食い込ませる力は緩めない。完全なる身の安全や、心の底から納得がいくような説明がなければ彼は離れてくれないだろう。
「ああ、その機関だ。機関は世界掌握を企てていて、あんたを襲ったその”妙な『能力』を持つ連中”はオレたちの敵だ」
「ほう、なるほどな。どうやらあながち嘘ではないようだ」
「そうだ嘘じゃない。オレたちはあんたのその働きぶりを見て、勧誘しにきた。それがダメなら、協力してくれるという姿勢を見せてくれるだけでもいい」
「たかが個人を？　たった一人が入るだけでどうにかなってしまう

組織なのか？」
「オレたちは軍じゃない。戦闘員は居るが、まともに戦争なんてしないし、あんたが今までしてきたような戦闘は一切ない。個人と個人がＣＱＣをかましあうような戦闘だ。そもそも敵が常に範囲攻撃をしてくるような連中ばっかだから、あんたの世界での常識で戦うと痛い目に遭う……っていうのは知ってるよな」
知っているはずだ。
その戦闘を行ったという情報は聞いている。
その上で生きているから、有用性が高いという事で勧誘しろと命令しているのだろう。
「まあ確かに。あんな連中とばかり戦っているんだとしたら、同情するよ」
「な、なら――」
「話は後だ。ここだと目立ちすぎる」
ある程度の信頼が得られたのだろうか。
レックスはナイフごと腕を引き剥がし、すかさずコートの中へとそれを収める。衛士もコートのボタンを閉めて、大きく息を吐いた。
蒸気のようなそれが空気に流れ、やがて溶けていく。
彼は先ほどと同じような距離で対峙し、肩をすくめた。
「キミ、行く所があるのかい？」
「いや。ついさっき来たところでね」
「ならウチに来るといい。信用するにしろしないにしろ、少しだけ興味が湧いた」

## 任務：傭兵『レックス・アームストロング』と交渉せよ　？

入って右手側のユニットバス。短い廊下を挟んだ寝室兼居間には、カウンターが付いた台所があって、その壁際に寝台を置き、窓際に小さなテーブルを配置してあった。それだけの質素な部屋だが、少なくとも外よりは上等であり、空調からの熱風が常に部屋を温めていた。

衛士はコートをテーブルの椅子に掛け、ギターケースを壁に立てかける。遠慮無く腰をかけると、台所からコーヒーが注がれたカップを二つ手にするレックスがやってきた。

「砂糖は入れるかい？」

「いや、どギツいブラックで大丈夫だ」

「じゃあこれ。口にあえばいいけど」

衛士の前に、焦げた灰から抽出したように深い茶系の液体が並々注がれたカップが置かれた。レックスが腰をかけるのを見ながらそれを手に取り、口へと運ぶ。皮膚が火傷しそうなそれを唇につけて――”視た”未来に己の生存を認識し、口に含む。

毒は入っていないようだ。

「ああ、美味しいですよ」

舌にこびりつくような苦さが残る。後味も何も、感想が苦い以外しか残らないソレは、されど身体を温める。同時に眠気が走る頭も冴えてきた。

これで風呂にでも入れれば完璧だ。

それで、と衛士は大きく息を吐いた。

ぬくぬくと温かい空気に触れながら、気が抜けてしまいそうな心を引き締めてレックスに対峙する。

「あんたに対しては無条件で情報は教えよう。もっとも、オレが説明できる範囲内のことだけど」

現時点ではとにかく彼に信用してもらうしか無いのだから、この

選択は決して間違ったものとは言えないだろう。
仮に彼が協会側に回ったり、あるいは既に協会の手先だとした場合はまたその時に処分するだけだし、特に問題があるわけでもない。協会が知らぬ機関の秘密が、未だ残っているようには思えないからローリスクハイリターンだ。
「そうかい？　なら遠慮なく……キミたち機関は世界掌握を目的とすると言ったね。それほどの軍事力、あるいは資産を持っても協会という組織に妨害される、手こずってしまうようなものなのかい？」
身をゆだねるとすれば最も重要になるだろう事柄だ。
ただ貧弱な組織に雇われて、おごり高ぶったオーナーに無茶な仕事ばかりを押し付けられて死ぬのなんて誰もしたくはないだろう。
だが機関が持っている力、その強みというものをどう説明すればよいのだろうか――にわかに思惟して、衛士は頷いた。
右目の眼帯に手をかけ、引き剥がす。それを握ったまま手をテーブルに置いてから、閉じた瞼をゆっくりと開ける。
濁った白い瞳がレックスを射ぬく。
途端に、彼は思わぬ気迫を感じたようだった。咄嗟に武器になりそうなカップに手をかけて内容物をふりかけようとして、それを寸でのところで抑える。それほどまでに、レックスはその瞳に何かを感じていた。
――現在、衛士の右目は何も見えていない。そしてそれが本来の右目だった。
随時、五分間の未来を見続ける左目とは違い、こちらの能力は意識的に発現することが可能となっていた。
五キロ前後の遠隔視に、透視、透過能力。
そしてなによりも、目覚めた時に新たに得た、おそらく能力の真骨頂と言える能力……。使い続ければ五分で限界となり、ソレ以上はまともに使い物にならなくなるそれらだ。使い所はしっかりと見極めなければ単純に身体の負担になってしまうだろう。
「純粋な軍事力で言えば、アメリカにやや劣る程度だ。核を持って

いないから交渉という立場まで登れないが……その他に、この世界には存在しない特殊な技術を保有している」
今でこそ世界と均衡している機関だが、その気になればどうとでもできると宣言……しているわけではないが、そういった事を匂わせている。この地上での援助が無くとも最低一〇〇年は生存できる環境にある機関は日本だけだが、アメリカは軍とズブズブで抗いようが無いし、ドイツだって同様だ。
だから世界だって、そうそう世界抑圧機関というものを邪険にしているわけではない。だからこそ国連機関の一つとして存在が認められ、受け入れられたのだ。
世界を掌握すると言っても、今はただ協会を殲滅して、さらに力を見せつけ協力体制から、向こう側から支援をさせてくれと懇願する位置にまで這い上がるだけだ。目標達成はすでにあと少しにまで迫っている。
衛士はそう説明してから、右目に意識を高めた。
「協会だけが邪魔なんだ。今更になって、機関の裏切り者が創設した組織が……オレと同じ特異点と呼ばれる機関に作られた超能力者が、邪魔をする」
昂ぶる。
誘発されるように思い返される、苦い思い出。肉親が虐殺された記憶。助けだした仲間が殺された記憶。そして、自分が殺された記憶。
右目、その眼窩に蒼い炎が灯った。
そしてその直後に――精神が、その炎に炙られるように削られる。呼吸が乱れ、ただ座っているだけなのに疲弊する。
額からじわりと滲んだ汗が頬を伝って流れ落ち、衛士は大きく深呼吸した。
今にも破裂してしまいそうな憎悪を抑えこみ、心を落ち着かせる。やがて炎だけを維持して、右目の視点を少しだけ前に上に持ち上げた。

「どうした、エイジ？」
「いや、大丈夫だ。気にしないでくれ」
また深く胸いっぱいに息を吸い込む。
衛士の精神（こころ）はそこで安定した。
「レックス、今の時刻は何時だったかな？」
「え？　ああ……っと、午後二時〇二分だけど」
「そうか、”二時〇二分”だな？　悪いが、今からそれだけを意識しててくれ。ソレ以外を考えないでくれ。三分になっても四分になっても、その時間だけを意識してくれ。あんたの疑問を解消する、素敵な魔法を見せてやる」
「二時、二分を……」
袖をまくって腕時計を眺めていたレックスは、それからじっくりと、睨みつけるように時計を見続ける。
壁掛けの時計が無いために妙な緊張の中、数十秒が経過した。
あるいは一分かもしれない。その前後とも考えられるが、ともかくただ一つのソレを深く心に刻むにはあまりにも十分過ぎる時間が経ったのだ。
「覚えたか？」
「覚えられないって言ったらどうする？」
「……準備はいいか」
「何をするかしらないけど、いつでも」
レックスは軽口を叩きながらも、神妙な面持ちで衛士を見つめる。
彼はその視線を受け、そして見つめ返しながら――指を鳴らした。
その刹那。
意識が、身体の中に吸い込まれていくような感覚に陥った。
視界が瞬間的にブラックアウトする中で、目眩のようにグルグルと回り始める違和感を覚える。
まるでどこか別の空間に飛ばされたような、奇妙な感覚。
その直後に、ぷつりと何かが途切れ――闇に落ちた視界に光が取り戻された。

「……ふー」
衛士は大きく息を吐いた。
「今何時？」
そして間を置かずに訊ねる。
彼はやや怪訝な表情をして、
「だから、二時二分……ん？　あれ、おかしいな……」
腕時計を凝視しながら疑念を口にする。
彼の見る時計の長針は十二から三つほどメモリが左にずれた位置に停止していて――そもそも、それまで彼自身、時刻を確認しようとするまで概ねの時刻を把握すらしていなかった。
だから思わず漏れたその時刻に、何か妙だと考える。なぜ時間を聞かれて思わずその時刻を答えたのだろうか、と。
――それは時衛士自身、隠しておきたかった能力だった。
今の”巻き戻し”で機関の誰か、あるいは協会の勘のいい誰かがこの能力に気づく可能性が高くなる。
遠隔視、透視のさらなる切り札として伏せていたものだったから少しばかりためらわれたが、今の状況で渋っていてもラチが明かないことは明らかだったから、仕方のないことだろう。
「そう、二時二分だ」
それは『時間を巻き戻す』直前の時刻である。
『時間回帰』は使用者以外全てに干渉して行われる。そして、干渉されたものは例外一つ無く全て五分前に回帰される。意識も、傷も、記憶も、それらを引き継ぐことは決して無い。
だが、それが起こったということを認識する方法ならばある。ある意味修行法というようなもので、衛士自身が行なっていたものなのだが、それは時間が巻き戻る直前に、時間が進退する事によって変化してしまうモノを強く意識することだ。
この場合はわかりやすく時計を使用したが、故意にモノを破壊してもいいし、何かを傷つけてもいい。

なんにせよ”時間が進んだはずなのに”、あるいは”壊したはずなのに”という疑問を抱けるような状況にさえなれば半ば成功である。

そういった状況に、時間が巻き戻るという概念を加えてやれば、戸惑いながらもそれを理解することができる。納得は後回しでも構わない。

かいつまんでそれを説明すると、レックス・アームストロングは目を見開いて衛士を凝視した。

――状況は衛士が眼帯を外した直後に巻き戻ったはずだ。

ならば、彼からしてみれば濁った白い瞳に突然蒼い輝きが灯った、奇妙な場面に遭遇したことになる。

そして印象的だった瞳のこともあって、レックスは大きく嘆息するように息を吐いた。

「そうかい。キミの言うとおり、その世界掌握出来る技術を持っているのは理解しよう。今でも正直わけもわからず混乱しているが、時間が巻き戻ったことだけは真実だと言い切れる。ボクが体験したんだからね」

だが、と言葉は続く。

「返答になっていないな。ボクは、協会に手こずる程度の戦力なのか、と訊いたんだ」

「正直、未知数だ。今のオレなら負ける気はしないし、そろそろ協会も本気に潰しにかかってくる。機関としては万全の状況にしておきたいんだろう」

「キミのような存在は他に居ないのかい？」

「オレみたいなのってのは居ないな。少なくとも日本には。ただ、特殊能力を持つ道具を扱う奴らが数十人居る。スーパーマンみたいな身体能力になるような、特殊な道具からなにやら、たくさんあるが――その道具にさえ使えるやつやらがいて、適正があるやつしか使えない」

「普通の兵隊でも対応できるだろうに」

「たぶんな。だが慣れて無いから、相手に超能力出されたら対処法がわからなくなっちまう」
衛士はそれから大きく息を吐いて、コーヒーを口に含む。それから右目に眼帯をして、蒼い輝きを漏らしながらも一先ず封印した。
「まあ唯一救いなのが、協会連中の能力のことだな」
「へえ、一番重要なところだけど、またなんで？」
「付焼刃（スケアクロウ）っつって人為的に能力を得た連中の能力は、得た時点で既に限界、最大なんだ。成長がない。ただ個人の熟練度だけが問題になる」
その点、特異点と呼ばれる彼らの場合は未知数の成長を遂げる。
それこそが特異点と呼ばれる所以でもあり、唯一奇跡を願い、賭けられる存在でもあった。
「それに、付焼刃は空間に干渉する能力だけだ。炎を出したり、温度を上下させたり。その数は数多だが、オレのような能力は一切使えない。ごく”常識的な能力者”だ」
「はは、常識的、ねえ。その存在が非常識だっていうのに」
「まあそりゃそうだが――」
衛士は思わず震撼する。
言葉を途絶し、そして勢い良く立ち上がる。膝裏で椅子を弾くようにして、それから背もたれからコートを引き剥がして着こむ。
それから立ち上がったままコーヒーを一気に飲み干すと、壁に立てかけたギターケースをテーブルの上に置いて、ジッパーを開けた。
「ど、どうしたんだ？」
「ああ、コーヒーご馳走様。あんたは今は無関係だから、今すぐここを引き払ったほうがいい」
思い出したようにポケットから財布を取り出して、中身の紙幣を全てテーブルに叩きつける。
バラバラになった狙撃銃を手軽く組み立てながら、衛士はさらに続けた。
「どうやら勘の良い連中がここにも居たらしい。多分、あんたを追

ってたやつかな。あんたは連中に手をかけてるわけだし、ただ逃がすわけにゃ、いかねえしな」
やれやれと肩をすぼめて衛士は嘆息した。箱に入った7．62mmの弾薬をコートのポケットに突っ込み、そして狙撃銃に最大数を装填する。さらにコッキングレバーを引き、弾薬に一発収めてさらに一つ。
念のために安全装置（セイフティ）を掛けてから、ギターケースをそのままにして準備が完了する。
その頃になると、レックスも毛皮の帽子をかぶり、負紐でアサルトライフルを肩から提げていた。
バックパックを背負って、室内の荷物は全てが片付けられていのを見て、衛士は彼へと視線を移した。
「いいのか？」
「ボクを追ってきた連中なんだろ？　結果的にキミが位置を気づかせたにしろ、尻拭いくらいは出来るさ」
「……正直、助かるよ」
衛士は思わず頬を弛緩させるように微笑んだ。
「それはこっちの台詞だ」
二人は視線を交差させ――言葉を交わさず合図をしたように、同時に部屋から飛び出した。

## 任務：障害を排除せよ

「なあキミ、どうして敵が来るってわかったんだ？」
レックスは笑顔で聞いてくる。
――やはり五分の猶予があっても、一度姿を発見したら逃げきるのは難しい。
「オレは目がいいからな」
呼吸を乱すこと無く大通りを走り続ける彼らの背後には、黒塗りのワゴン――ミニバン――がフルスロットルで迫っていた。
「ならさ、ほら。さっきみたいに時間戻そうよ」
そうすればまた新しい対処ができる。こちらに圧倒的なまでに有利な状況を導ける。
レックスの言葉に間違いはなかったし、便利な力を目撃して尚利用しようと考えられる人間ならば迷いなくそう口にするだろう台詞だ。
衛士は横に首を振る。
「冗談じゃない。ありゃオレの隠し玉みたいなもんなんだ。簡単に使えないし、なによりもすげぇ疲れんだよ」
切り札には成り得ない能力だ。
そもそも、まともな武器になる能力はない。飽くまで相手よりは有利になる情報が流れこんでくるだけで、全ての事を動かすのは自分だけなのだ。自分で考え、動かなければ全てはどうにでも動いてしまう。
主導権を得るか否かの判断は、衛士に委ねられている。
「ま、オレが動かなくちゃなんだよな」
衛士は狙撃銃の負紐を肩から下ろし、銃を構える。周囲の人間がエンジンの駆動音に、その爆音に驚いて道の隅に身を退いて行く中で、銃床（ストック）を肩に押し当て、安全装置を外す。
「レックス！　横っとべぇっ！」

そんなめちゃくちゃな叫び声を合図にして、衛士は足を止める。と同時に大地を弾くように振り返り、勢い良く車目掛けて飛び上がった。
車が唸り声を上げて、コンマ秒で肉薄する。
やがて膝がボンネットにぶつかり、姿勢が勢い良く前かがみになる。身体がフロントガラスに叩きつけられ、屋根を転がり、まるでアクション映画のようにコロコロと車の上から滑るように落ちていく。
その過程、ちょうど身体が車から引き剥がされる瞬間に、衛士はそのミニバンの尻を見て――引き金を引いた。
右後輪のタイヤが破裂する。
凄まじい破裂音を周囲に撒き散らし、およそ七〇キロほど出ていた速度が僅かに落ち、動揺がハンドル操作に現れた。途端に車はぐわんぐわんと弓なりに走り、スリップ。
車は回転しながら大きく弧を描き、やがてその横っ腹を適当な建造物に激突させた。
衛士は全身を摩擦しながら大地を転がり、そうして落ち着いた頃に立ち上がる。
レックスは驚いたような顔で駆けつけた。
「滅茶苦茶だな、キミ。スタントマンになれるよ」
「ちょっとの無茶ぐらい覚悟の上だ。にしても、これで終わるようには思えない……逃げるぞ！」
「ああ！」
スモークが貼られていて車の中が見えない。だから中の様子がいまいち分からないが、少しばかりはここで足止めされていて欲しいものだと思う。
衛士はさっそくその車が来た方向に走り出し、レックスはすかさずその後に続いた。
「はぁ、ったく。青春映画のワンシーンかっつーの！」

通りから路地に入り、対面の通りへと出る。そこから遮二無二走り続け、少しした所で足を止めた。
人通りの少ない路地だ。現在は彼ら以外に居ない。
迎え撃つとすればこの場所が適切だろう。
「やっぱり、寒い時は運動に限るよね」
「ああ全くだ。こんな心臓に悪い運動は二度としたくないけどな」
コッキングレバーを引いて薬室（チャンバー）に弾丸を装填。衛士は大きく息を吐いて、車一台が通るのもやっとなその通路の壁にもたれかかった。
「だけど、ここからが本番なんだよな」
「ああ、あの付焼刃（スケアクロウ）とかいう連中ね。正直アイツら『能力があるから俺最強』って感じのバカだから、余裕でしょ」
「その脳筋みてえな奴にゴリ押しされてみろ。余裕で死ねるわ」
「ま、今度はボクの力を見せる番かな。立場はともかく、今は生き残るのが最優先だ」
「んじゃよ、もし協会に、仲間になれって勧誘されたら、あんたはどうすんだ？」
「有利な方につく。人数がいてもバカばっかはちょっと勘弁かな」
「ああ、ちょっと安心した」
ほっとわざとらしく安堵を漏らす。吐息は白く染まりあがり、簡単に空気中に溶けてしまう。
そんな折に、ぜえぜえと呼吸を乱す連中が路地の中へと侵入した。
二人組だった。
何かスポーツでもやっていたのかと思うような体つきは、分厚いコートを着ていてもよくわかる。
一人はスキンヘッドの、マフィアか何かのような男であり、もう一人はドレッドヘアーの黒人だ。そしてふたりとも揃いも揃って手ぶらだった。
何かの冗談なのかと思ったが――表情の中に垣間見える余裕から、どうやら能力に自信があるらしい。
衛士は一先ず発砲を試みる。

銃弾はいつものように回転して瞬く間に男の胸に肉薄。そして貫通。
スキンヘッドの男は胸から血を吹き出して、空を仰ぐ。それから膝を折るように崩れていく、その最中で動きが硬直した。
否、固まったのはその男の動きだけではない。
彼は全身に霜を落としたように白く凍えて凍りつく。周囲の大地、壁には氷が亀裂のように走っていく。
気温は先ほどとは比べものにならないくらいに、まるで冷凍庫にでもぶち込まれてしまったのかと錯覚するほどに下がり、冷えてくる。
「おいおい、お前一体誰殺してんだよ……？」
そうして声は、怯えて腰を抜かすドレッドヘアーの男の後ろから聞こえてきた。
――発砲音。
男の後頭部が撃ち抜かれるのと同時に、姿が現れた。
「テメェら散々手間取らせやがってよ、いい加減頭に来んぜ……！」
突撃銃を構える二人組。
それぞれ覆面をして正体を隠すが、迷彩服に覆面で突撃銃を構える輩だ。異様だということだけはすぐに伝わった。
「なあキミ、思ったことを言ってもいいかな」
「ご自由にどーぞ」
「帰りたくなってきた……」
「なら良いぜ、見学コースに移行だ。よく見とけよ……っ！」
弾丸を装填し、衛士はレックスの一歩前に躍り出る。
面倒だから少しだけ無茶をしようと彼は思った。狙撃技術を近接戦闘に生かした、無謀過ぎる銃撃戦。それを試みてみようと思っていた。
「ふぅ……はっ！」
腰を落とし、構え、照準。
発砲。

が、二人は即座に先ほど死亡し凍りついた一般人の陰に隠れてやり過ごす。弾丸は死体の頭部を砕き、隠れた男に凍りついた肉片を浴びせるだけに終わった。
弾丸を装填。
衛士は迷いなく、だが走るわけでもなく前進した。
「レックス、もうちょっと後ろの壁際にいてくれ。多分、そこは危ないかも」
照準、発砲。
スキンヘッドの右腕が崩れ落ち、背後の地面に弾丸が叩きつけられる。
男達は隠れるばかりで、行動はない。そう思っていると、ふいに足元へ、氷が亀裂を作るように線状に走ってくる。
衛士はそれを落ち着いた面持ちで見極めて、それがすぐ股下で停止したのを見て、身を翻す。
刹那、もぐらが這ってきたような穏やかさは途端に失せ、音もなく氷は錐状の氷柱（つらら）となって虚空を貫いた。切っ先は衛士の頭頂に達する長さである。
男はそんな様子を、氷像となる死体の陰から覗き見ていて――。
発砲。
弾丸は、吸い込まれるように男の額を撃ちぬいた。
悲鳴もなく、血を吹き出して呆気無く仰け反り、背中を地面に叩きつける。
一人撃破だ、と衛士は何の感慨もなく、それが当たり前のように心に呟いた。
「く、て、てめえ……まさか――と、トキ、エイジなのか……？」
男が不意にそう口にする。
敵に名前を呼ばれたのは、さしもの衛士もこれが始めてだった。
だからいざ”実際”に聞いてみても、動揺してしまう自分に気づいて、彼は足を止め嘆息する。
時間稼ぎなのだろうが、どちらにせよなぜ名前が知られているの

かを聞き出さねばなるまい。その理由が如何なものか確かめなければ今後の仕事に関わるからだ。
ただ当てずっぽうだったのかもしれないし、何かに気づいて……という具合なのかもしれない。
コッキングレバーを引き、ポケットから弾薬を幾つか取り出して装填しながら、衛士は口を開いた。
「何を言っているかわからないが、そのトキ・エイジだとしたらなんだっていうんだ？」
「いや、そうだ。その顔、そして眼帯……その下には、あの光る蒼い目があるんだろう？　そうなんだろ？」
「……そういうお前は誰なんだ」
こいつは、多分――。
カチリと、頭の中で何かのスイッチが入るのを、衛士は確かに聞いた。
「ははっ、やっぱりてめえか……ッ！　くく、あははッ！　随分立派になったなあ！　あん時ゃ『姉さん姉さん』でまともに戦えなかったんによ、ああそうか……正直言やあよ、俺らは最後の、お前の目にビビって……」
ビビってた。
だから最後の最後、既に死に体である時衛士に止めを刺す瞬間にまで至ったというのに彼らは逃げ出してしまった。
四十二人という圧倒的な数の暴力がありながらも、たった一人の意識なき、純粋な殺意だけを孕む存在に畏怖して体が動かなくなっていた。
ただ一人の少年の肉親を焼き殺し、犯し殺し解体し、それを目の前でやってのけて――男は懺悔でもするようにそう口にする。
仕事の中の一つであった少年に対する懺悔。今まで、あの日から妙に頭の中に残っていた出来事。ここで全てを吐き出し、許してもらえればすっきりする。彼はそうとさえ思っていた。
そもそも殺すための仕事ではなかったのだ。彼を、この時衛士を

『特異点』に昇格させるために絶望を与えさえすればそれで良いというのが、上層部からの命令で、だがその時点では何も知らず”痛めつけろ”とだけ言われていたから、仕方のないことだった。
そこまで言うと、彼は顔を上げる。
銃口はちょうど、太ももに突きつけられた。
「ああ、そうなんだ」
発砲。
血しぶきが舞う。穢れた血が、衛士の全身を満たしていく。
男は言葉にならない悲鳴が撒き散らしながら横たわり、衛士は熱の失せた声で続けた。
「だからなんだよ」
発砲。
もう片方の足に弾丸が突き刺さる。
肉を裂き筋を千切り大腿骨を砕いて、尋常ならざる出血。太い血管でも断裂したのだろう。
ここで仮に生き残ったとしても、もうまともな生活は送れないだろう。
衛士は腰に手をやりナイフを抜こうとするが、そもそも持ってきていないことを思い出した。
そうだ。そもそも近接戦闘をする予定はなかったのだが、どうにも惜しいことをした。
衛士は負紐を肩に掛けて、狙撃銃に安全装置を掛けて、肩に提げる。
コートの中から拳銃を抜き、弾丸を薬室に送り込んだ。
「黙ってりゃもっと楽に死ねたのに、お前バカだな」
そしてどうしようもないクズだ。
全てを懺悔すれば、「よく素直に言ってくれた。お前を評価して許してあげよう」とでも言われると思っていたのだろうか。
ならばなんだ、ここは彼らにとって小学校か中学校か？
ふざけやがって……！

発砲、発砲、発砲。
両肩に弾丸を突き刺し、肘、手のひらを撃ちぬく。さらに残った弾丸を全て腹に叩きこんで、にわかな硝煙が上がり、あたりに空薬莢が撒き散らされた。
既に悲鳴はない。
衛士が男の口元に手を近づけると、その血まみれの口からは未だに臭気が吐き出されている。
良かった、生きていた。意識があるかは定かではないが、血だまりの中で仇敵は生きていた。
衛士は大きく息を吐くと、静かに呟く。
「死ぬまで苦しんでろ」
既に仕事は終えた。
彼は、彼らがそうしたように止めを刺さずに背を向ける。拳銃をコートの内側のホルスターにしまい込んで、だけどボタンは閉めずに、熱くなった身体に冷気を当てる。
「前一人殺したから……あと四〇人か。こんなバカばっかなら数えるのも簡単なんだがな……」
白いコートは、奇抜な返り血の模様を新たにつけて、やがてレックスの元へとやってくる。
彼はどこか怯えた、正確には驚いたような表情で衛士を見ていた。
「人を殺すのに躊躇が無いね」
「なんだよ、人には家族があって、価値があるみたいな説教するつもりか？」
殺した相手にも家族がある。以前そう考えたことがあったが――今はどうも思わない。
こうやって死ねる場所に来ている時点でその責任を負ってやる必要は皆無であり、もし責任を取らざるを得なくなったとしたら、衛士は迷いなく引き金を引いて弔うだろう。彼はその決意を、とうの昔に固めていた。
「いいや、頼もしいと思って。キミ、歳はいくつ？」

「言わなかったか？　十七だって」
「じゅ、十代かあ……若いな」
「にしても、こんだけドンパチ騒ぎしちゃモスクワにも居られない――って、マジかよ……」
衛士は思わず左目を塞いだ。大きく息を吐き、肩を落とす。その所作は見るからに落胆の行動だった。
レックスは、それでなんとなく察しながらも、とりあえず訊いてみる。
「どうしたんだい？」
「警察に、それとさっきみたいな黒のワゴンが数台、ここに来る」
「……はは、どうしよう」
まるで冗談を言ったみたいにレックスは笑ってみせる。ほうれい線が浮き出るあたり、彼もそうそう若くはないのだろうと、彼は場違いにそう思った。
「まあ、最初の内に数を減らしておこう」
衛士は言って、手早くその場から離れるように走りだした。

## 任務：障害を排除せよ　？

時衛士は僅か齢十七にして、傭兵さながらの修羅場をくぐり抜けてきた。
そういった物珍しさや、人当たりの良さ、そして認められる確かな実力から多くの人間が彼に寄ってくる。
だがそれと同じくらいに、敵も多い。
それは、例えば今のように。
「軍まで動いてるみたいだけど、どうなの？　もしかしてテロリストと間違えられてる？」
後ろからはサイレンを鳴らすパトカーが三台ほど連なってついてきている。さらに交差点から合流した二台、パトカーの尻に食いつき、さらに正面から新たに二台やってきた。頭上からは警察のヘリコプターが飛び、住民の避難がなされた通りは閑散としていた。
「軍なんて知らん。警察ばっかだろ」
そうして彼らは今、レックスが見事なテクニックで放置されていた大型バイクを上手く活用してくれたお陰で、なんとか追いつかれずに済んでいる。
全身に突き刺さる寒波を物ともせず、彼らは数十分にも及ぶカーチェイスの結果、いよいよ建造物の少ない一帯へと出てきた。
レックスは前を向いてハンドルを握り、背中合わせに座り込む衛士は、そこでようやく狙撃銃を構えてみせた。
「なあレックス、もういいんだろ？」
「そうだね。やるならここいらが良い」
「たく、手がかじかんで反応が鈍いぜ……」
体感温度が既にゼロに近いせいで、指先の感覚は失われている。
衛士は手のひらでコッキングレバーを何とか固定すると、肩で銃を固定し、手首に押し当てるように力一杯引いて弾丸を装填した。
これでは引き金を弾けるか少しばかり不安だ、と思いながらも、照

準器を覗き込めばそんな意識の一切が消え失せた。
「キミ、言っておくが――」
発砲。
慣れた衝撃が木の銃床（ストック）を介して肩を打撃する。同時に銃口から散った火花が、その硝煙が熱をもって顔に掛かる。にわかな暖かさに、衛士は思わず大きく息を吐いた。
７．６２ｍｍの弾丸はいつものように飛来する。パトカーの前輪に触れると、間もなく分厚いゴムを貫いてホイールに突き刺さった。パトカーは走行中に地面に火花で軌跡を描きながらホイールからゴムを引き剥がし、そして破裂音と共にハンドルの自由が利かなくなる。
スリップ。
仲間のパトカーを巻き込み、盛大な衝突音を響かせて追手の警察は、頭上のヘリコプターのみとなる。
背後のミニバンは、器用にその隙間を通り抜けてやってきた。
「何か言ったか？」
「いや、なんでもない」
レックスは肩をすくめるように笑って、勢い良くハンドルをひねった。
エンジンが唸り声を上げ、マフラーからの排気が増幅する。振動が尻を叩き続け、加速した。
雪が溶けていない道路を走り、舞台は郊外へと移行する。
バイクが徐々に速度を落として――やがて停止したのは、それから間もなくの事だった。
「まあ、避けられないことだったと思うよ」
彼は力なく言った。
そして衛士自身もそうだと思っていた。
バイクの先には装甲車が一台。背後からは協会のものと思われるワゴン車が四台。
これぱかりは、さすがに八方ふさがりだと言わざるを得なかった。

この状況から逃げ出す案は無いし、生き残る可能性すら低いことを悟っている。
「どうした？　突然無口になって……ビビったのかい？」
「……っ」
口ごもる衛士に、レックスは軽く笑った。
バッグパックに無造作に突っ込んだＭ１６を抜いて構える。さらにそのバッグから無造作に、長方形の手榴弾を取り出した。
「見るからに向こうの方が強そうだけど、寝返らないのか？」
「……キミは何を言ってるんだ？」
声は、呆れ返ったような彼の心境を孕んでいた。
「さっきのは見学コース。これは体験コースだろう？　まさか、こんな”イイところ”で帰れなんて言うわけじゃあ無いよね？」
「能力者が複数人に、装甲車相手だぞ？」
「……キミはボクを無礼（なめ）てるのか？　次そんなふざけた事を口にすると……ははっ」
妙なまでにノリノリでそう告げた後、装甲車のドアが開く。
その刹那に、レックスは握っていた閃光手榴弾を作動させ、力一杯装甲車の方へと投擲してみせた。
衛士の頭を強引に突き伏せて、そのままバイクの陰に隠れること数秒。装甲車の中、そしてワゴン内が少しだけ慌ただしく感じられて――波紋のように広がる衝撃波と共に、爆発的な閃光が周囲を包み込んだ。
「キミはさんざ粋がっててたのに今になってコレって、ギャグか何かかい？」
空気が重くなったのか。
あるいはあまりの衝撃に鼓膜が麻痺してしまったのか。
ともかく、レックスの余裕綽々な台詞はこもったように鈍く聞こえて、まぶたを透過して瞳に突き刺さった閃光のおかげで世界は白と黒とを反転させていた。
有能かつ有名な傭兵は、幼子の手を引くように立ち上がらせる。

「幸運なのはキミが居ることだ。後ろを向いて、キミは後ろだけに集中してくれ」
言いながら彼は装甲車から飛び出て、開いたドアに隠れる陰へと射撃する。
衛士も、言われるがままに麻痺する視覚、聴覚をそのままに伏せて、構え、照準し――発砲。
身体に染み付いた感覚やクセなどが手助けし、弾丸はフロントガラスに突き刺さり、貫くこと無く停止した。ガラスは白く染まるように粉々に砕けていたが、飛び散ることはなく、一応ガラスという形状を維持している。
――胃が痛くなる。
どうやっても、どう行動しても”死”しか見えない。
コッキングレバーを引く力が、引き金を弾く意思が薄れていく。
装甲車の向こう側から異質の駆動音を、振動を感じながら彼は大きく息を吐いた。
ミニバンからは、ようやく総数十四名となる覆面の男達を吐き出した。構えるのは、このロシアの地を意識したのだろうＡＫ－１０７だ。銃身（バレル）の下には砲筒（グレネードランチャー）が装備されている。
彼らは見事に狙撃を意識して車の陰に隠れたまま、二人組の様子を伺っていた。
装甲車も同様だ。レックスの射撃は威嚇程度の効果しか発揮していない。
これで弾切れにでもなってしまえば……。
「く……くそっ……！」
そうだ。
助けを呼ぶしか無い。
どうあっても死ぬわけには行かないのだ。この状況なら、すぐにでも誰かを送ってくれるはずだ。
衛士が、敵を照準しながらコートのポケットから通信端末を取り出す。凍えた指先で操作し、焦りを抑えてダイヤルを回した。

少しばかりの無音が続き――。
発砲音。
壁となるドアの脇から突き出された銃口から放たれた弾丸は、衛士の左耳、そして左手の人差指と共に通信端末を吹き飛ばした。
ぞわり、と背筋が粟立つ。
心臓に冷血が送り込まれるように、息が詰まった。
それからややあって、指先に、そして左の失われた耳たぶがチリチリと焼けるように熱く、常に刃物で斬りつけられているかのような激痛を覚えた。
悲鳴を押し殺す。
呼吸が不安定になって、衛士はそれでも手を入れ替え、引き金を中指で操作した。
発砲。
弾丸はドアに穴を開ける。それだけだ。敵も殺せない。役目も果たせず、己の命を守れない。
――ミシェルが異変に気づいたとして、仲間を送り込んでくれたとして。
果たして、それまで生きていられるだろうか。
ここで五分を巻き戻したとしても既に手遅れだ。
駄目だ。
また、死ぬのか。
オレは――。
「なあキミ、何勝手に絶望しているのかわからないが、まだ生きていたいというつもりならさっさと働いてくれないか？」
レックス・アームストロングは力強く意思を持つようにそう告げる。
彼は前を見据えたまま、背後の状況など音から察するしかしていないはずなのにもかかわらずそう言った。
敵を威嚇したまま、さらに応援の装甲車を見ながら、衛士を激励する。

「思考を停止すな。キミは多分、未来を視るだとか、感じるだとかしているんだろう。そしてそれがキミを手助けしてくれているのだろう？」
敵の襲来を察知している所からそう考えたのだろう。妥当な判断だ、と衛士は思う。それがどうした、とさえ思った。
「だといのにキミは諦めた。未来を知る事ができるのに、結果を変えられるのにもかかわらず、過程だけみて諦めてしまった。愚かだよキミは」
もっとも、まだ子供なキミには仕方のないことなのだろうが。
レックスはそういって、大きくため息を付いた。
射撃をやめ、バックパックから弾倉を取り出す。すると装甲車から飛び出した三人程が一斉に衛士ら目掛けて射撃を開始して――衛士が今にも消え入りそうな声で指示する。レックスは言われた通りの位置に、そして跪いた姿勢で待機すると、弾丸は全身に掠るが直撃することは決して無かった。
出来るじゃないか。
満面の笑みで、威嚇を再開しながらレックスは口にした。
「どんなに余裕でも、どんなに絶望的でも思考だけは常にフルスロットル、走り続けろ。考えないことは生きることを放棄するのに等しいから」
口角を吊り上げ、その気持ちの悪い励ましの言葉に全身の毛という毛を逆立たせながら、獰猛とも言える笑みを衛士は浮かべた。
第二関節から先が無い人差し指を眺めながら、そこから滴った鮮血が雪の大地に紅い斑点を作るのを視界に収めながら。耳から流れた血が首を沿ってインナーを血まみれにする、具合の悪い着心地の悪さを覚えながら、衛士は大きく息を吐いた。
右手で眼帯を外す――否、その強引な所作は引き剥がすに相応しい。
限界など知るか。
言葉にはならず、されど口はそう言った。

「オレの後頭部を撃て」
続けてレックスに命令する。
右手に握るソレを投げ捨てる頃には既に、右目には凶猛な蒼い鬼火が、眼窩から溢れんばかりに滾っていた。
狙撃銃(どうぐ)を抱えて立ち上がる。もとより右利きだ。彼は左肩に当てていた銃床(ストック)を右肩に当て、引き金を右手に任せる。
その刹那だった。
不意に、窓からその陰をのぞかせていた男の姿が消える――刹那、消えると認識するよりも早く、男の気配は背後に迫った。
撃発。
戸惑い、躊躇いすらないレックスの発砲は、見事に瞬間移動してきた男の後頭部を撃ちぬいた。
頭蓋骨に穴を開け、流血と共に脳髄を垂れ流して男は倒れる。
感慨もなく、風景の一つとして彼らはその姿を見送りながら。
衛士は続けた。
「相手が動くまで待て。相手が自分から有利な陣形を崩してからがオレたちの仕事だ」
――果たして。
そう告げてからの均衡状態は、そう長く続かなかった。
痺れを切らしたのは、あっけらかんとしていた軍人、ではなく。
己らの能力者(なかま)の死をにわかに受け入れられなかった、その上で能力者という”絶対上位”的存在である自分たちがそう容易く死ねるはずがない、負けるはずがないという一種の信仰じみた思想に駆られた付焼刃(スケアクロウ)だった。
それこそが、付焼刃などと呼ばれる所以なのだとも知らずに。
「くらえ、豪雪(ナダレ)ッ！」
親日なのか、あるいはただのマンガファンなのか。
男は格好良く叫び、ドアから飛び出て腕を前に突き出した。
それとほぼ同時に、衛士が引き金を弾く。弾丸が飛来し、簡単に男の胸に血華が散った。

足元の踏みつけられて固められた雪がにわかに増量した所で動きが止まり、男は吐血し、崩れていく。
動揺してドアから飛び出て、その男を介抱、あるいは救助しに飛び出てきた妙に華奢な覆面姿の側頭部を、迷わず撃ちぬく。
数台分の列を成すミニバンの後ろの方から、甲高い悲鳴が聞こえた。
「軍の方は殺すなよ。そっちはある意味被害者なんだから」
「わかってるって。そっちは手伝おうか？」
「いらねえ」
そっけなく告げて、声の高い、明らかに女性であろう姿が半狂乱に銃を乱射して現れたのを見る。何の阻害も無く、車を穴だらけにして、また衛士らの足元に弾丸を突き刺しながら走ってくる。哀れだと思う、痛々しい姿に衛士は、その姿がもう少しだけ近づくのを待った。
発砲。
良い感じに協会連中全員に頭を撃ち抜かれた姿が見えるように、額を撃ちぬいた。
彼女は痛みを覚える間もなく逝ったのだろう。不意に声は消え、どさりと背中から倒れこんだ。
――上空からの視界は、未だ敵を監視している。僅かな所作すら見逃さず、それ故に片手での装填作業に余裕が持てる。
衛士はくたびれたように、細々く息を吐いた。
「あと八人」
「いい加減、今日は撤退してもらうように頼んでみれば？」
「冗談。んな弱みでも見せてみりゃソッコーで蜂の巣だ」
そんな折に、先頭の陰が砲筒を衛士らに向けるようにドアの隙間から突き出していた。
アホだ。
すごいバカだ。
衛士は思わずそれを一笑してから、狙い、撃つ。

さすがの衛士でもその砲筒の中に弾丸を打ち込むことは出来なかったが、その腹に銃弾を叩き込み、銃自体を破損させる。銃身もひしゃげて半壊し、使い物にならなくなる。ついでに男の悲鳴も耳に届いた。

そして自暴自棄に飛び出てきて、その身体から電撃が迸る瞬間、同時に胸を撃ちぬかれて鮮血を吹き出した。糸の切れた操り人形のように膝から崩れ、顔面を雪の中に埋める。

後七人。

能力は便利だ。

それこそ相手に有利に立てる。

だが、飽くまで有利に立てるだけであり、相手より強くなったわけではない。

だからこそ、彼らのように能力ありきの戦い方ばかりに徹していれば、こうして相手を追い詰めたつもりが追い詰められたことになった場合に対処できない。

衛士らも、彼らから見れば今こそ僅かな隙も無く、逆にほんの少しでも隙を見せれば殺してくるような強敵だ。だが本当のところは違う。攻め方、能力の活用方法さえ変えればいとも簡単に形勢逆転することが出来る。

彼らはただ、それを考える余裕を与えず、さらに何をしても殺してやれるぞという余裕を見せているだけだ。衛士が学んだのは、己自身が弱音を見せた時に畳み掛けられそうになったからである。

かっこいい戦術も戦略も持ち合わせない。堅実でもない。

それでも、これが現状で考えられる最善の状況打破の戦術であり、賭けでもあった。

――戦いに勝つにはまず考え、相手を崩すこと。

あるいは最初期の勢いを以て掛かることだ。猛禽が急降下して獲物の骨を打ち砕く刹那、つまり敵に掛かるその刹那に、それまでに蓄積した全てを放出する。

もっとも、一番良いのは戦わないことだ。

その上で勝利する。
戦闘とは作戦があって初めて起こりえる事象であり、それを防ぐには作戦の意図を挫けさせばいい。
もっとも、何らかの暗殺や殺害が目的であった場合は、覚悟をしなければならないのだが。
開かれたドアの上から二本の腕が突き出た。
衛士はその間を撃ちぬくと、怯えた声が聞こえてきた。
「ま、まってくれ！」
ドアの陰から、恐る恐るといった風に出てくる男は、覆面を脱ぎ捨てて、やがて姿を表した。
「こ、降参だ。これ以上、もう殺さないでくれ」
「随分と都合の良い台詞だな。分が悪くなったら手を上げて、動物よろしく服従の意を示せばいいのか？　なら、仮にさっきオレがそうしていればお前らは手を出さずに生かしてくれたのか？」
「あ、ああもちろ――」
引き金に掛ける指に力を入れる。
「口先だけの言葉はよせよ。問答無用で殺すぞ」
「……生かさなかった」
「命令か？」
「そ、そこの男だ。そいつが、俺たちの仲間を殺したから……」
「私怨か。それだけで随分と動いたな」
まあいい、と衛士は引き金を弾く。
弾丸は、力強くミニバンのドアを叩いて穴を開けた。
「一人だけ死ぬかもしれねえ所に出して交渉させて、他の連中は安全な所で返事を聞くだけか？」
衛士は狙撃銃を捨てて、コートの中から拳銃を抜く。
男は少しだけ安堵したように、口元を緩めた。
――そしてぞろぞろと、衛士の言葉に応ずるように姿が現れる。
自主的に手を頭の後ろに回して、その男の横に並んだ。七人は既に武装を解いてそれぞれ覆面を捨てる。男女入り混じるその中で共

通しているのは、誰もが怯え、表情を引き攣らせているということだった。
「おい、死にたくないなら一つだけ、素直に答えろよ？」
レックスは意識を衛士に向けながら、依然として戦闘に参加してこない装甲車を威嚇する。が、既に射撃はやめており、銃をつきつけるだけの形だった。
付焼刃は喉を鳴らす。
衛士は少し開けてから、言葉を紡いだ。
「今から約四ヶ月前……八月に日本で、ある少年に百人ほどで襲いかかった、そういう作戦に参加したやつ。黙って手を上げろ。五秒以内に、素直にだ」
五、四……数えると、意図がわからないのか、それぞれが目だけで互いに相談する。
そうして間もなくゼロになる、その直前に二人の手が上がった。
黒く長い髪を後ろで一つにまとめる女と、その隣に立つ短髪の男だ。それぞれ迷彩服にタクティカルベストを着こむ姿で、緊張の面持ちで衛士を見ていた。
「おい、キミ。分かっているだろうが、彼らは降伏している。決して次回は無いとは言い切れないし、恐らく彼らも今回さえ生き残れば懲りずにこういった場に参加する。だが、今はどうしようもなく無防備なんだぞ？　その上でキミがしようとしていることはとんでもなくゲスでクズだ。分かっているのか？」
「……オレの、唯一の人生の目標なんですよ。復讐する。それが今の、オレの生きる希望でもあります」
「虚しいだけだぞ。生産性がない」
「いいんスよ、終われば、オレの物語の幕を落とすだけだ」
「ともかくだ。今引き金を引けば、キミの中で唯一保っていたであろう何かが崩壊する。理解できているのか？」
――炊きつけたのはレックスだ。
それを重々承知しているし、お陰で今生き残れている。だが、ま

るでタガでも外れたように衛士は今行き過ぎている。単なる殺戮を楽しんでいない事だけが救いだが、心の中の闇ならば、ただの殺戮衝動に駆られるよりもはるかに深い”復讐”というソレだ。
泥沼に、どっぷりと首元まで使っている。だというのに彼は笑っていた。
この少年は、この若さにして戦える。こんな所で潰れるべきではないし、戦場でなくとも生きていける。素質がある。だからこそレックスは、本来ならば放って置く惨事を咎めていた。
時衛士が今仇を殺して、その途端に何かが変わるわけではない。ただ、その殺害や殺意が日常化するだけであり、さらに彼の言葉が誠になる。本当に、全てが終われば最後に殺すのは己になってしまう。その可能性が極めて高まる。
彼には救いがない。希望がない。だがそれは無いのではなく、彼が求めず作らないだけだ。
だから、今だけはこれを止めなければならない。
その刹那だった。
――不意に、衛士と付焼刃の間の虚空に光球が生まれたかと思うと、不意にその光が膨張した。
まるで閃光手榴弾が展開していく様をスローモーションにしていくようであり、それと同時に、妙な気配が増えたのをレックスは感じていた。
網膜を焼き尽くすような輝きが失せる。
それぞれの戸惑いの最中に、ソレは現れていた。
「……これは、どういう状況だ？」
褐色肌の娘は、その空気を肌に感じて同様に戸惑って、思わずそう訊ねずには居られなかった。
長い白髪で左顔面を覆うようにして、身体に張り付く全身タイツのような装備――『耐時（たいじ）スーツ』と呼ばれる、身体能力強化、その他諸々の特殊効果を備えるソレを着こみ、またその上にタクティカルベストを着込んだ格好で、腰に手をやる。

黙りこくって喋らない衛士に肩をすくめて、今度はレックスへと視線をやる。
彼は頷き、かいつまんで説明してやった。
「まあ、協会が降参してきたわけですが、彼が復讐のために”例の時”に居た二人を殺そうとしたんです。ちなみにこちらの前の連中は軍です。頭上のヘリは警察ですが、どちらにも死人は出してませんし、足止め以外でこちらからは手を出していません」
「……エイジらしいといえば、エイジらしいな。まあいい、この場の決定権は私に委ねてもらうぞ」
「ご自由に」
「エイジもいいな？」
「……、いいえ」
視線を流し、困ったように口をへの字に固めてから、衛士は短く答え、首を振る。
エミリアは一歩踏み込み、そのまま構わず、胸ぐらを掴み上げた。
衛士は驚いたように目を見開いてから、そのまま両腕を垂らし、抵抗を諦める。
言葉は彼の目の前から突き刺さった。
「現在（いま）の貴様の目的はなんだ？　言ってみろッ！！」
「れ、レックス・アームストロングとの協力体制を結ぶ事……です」
「貴様は今何をしようとしていた？」
「……オレの、あの作戦に参加していた奴を、殺そうと」
「貴様はそのクセに”私怨”がどうのこうのとご高説をのたまっていたのか？　随分偉くなったな貴様はァッ！？」
――全てを聞いていたのだろう。
あるいは、来る前のこの状況の全てをミシェルから聞いてきたのか。
どうであれ、エミリアはこれまでを知っていても尚わざとらしく彼らにこの状況を訊いていたのだ。
そして丁度いいタイミングで現れた。

随分とまあ、手の込んだ連中だ。
レックス・アームストロングの機関に対する評価は、微妙な位置へと登り始める。
エミリアは衛士を突き飛ばして振り返ると、そのまま一人ひとりを睨みつけ、眉間にシワを寄せたままで吐き捨てた。
「顔を覚えた。足元の肉塊（ゴミ）と同じになりたくなかったら、二度と私の前に現れるな」
次いで、ポケットから通信端末を取り出すと、何の警戒もなく耳に押し当てた。
「転送を頼む」
短く指示し、端末をしまう。
振り返ると、今度は呆然としつつも自分の荷物をまとめる衛士を他所に、今度はレックスへと照準を合わせた。
「貴様の身柄を一時保護する。乱暴にするつもりもないし、強要するつもりもない。敵を作りたくはないからな。衣食住を提供しよう。その後の判断は、貴様の自由だ。それでいいな？」
「文句のつけようがないですな」
肩をすくめて返事をする。
エミリアは仏頂面のままうなずいて――。
閃光が瞬いた。
そしてソレが収まり、三人の姿が消え失せた頃。
戦闘は終了し、傷だらけの付焼刃と、半ば被害者である巻き込まれた軍だけが、互いに標的を失って虚しくその場に残っていた。

## 手紙

「具合はどうだい？」
レックス・アームストロングは衛士の自室で優雅にコーヒーを飲みながら、眼を覚ました彼にそう声をかけていた。
失われた左手の人差し指は義指の骨組み装備されていて、指先はしっかりと動く。良く見れば、表皮のシリコンカバーが株されていないだけである。さらに左耳は頭ごと包帯で固定されていた。
衛士は自分の身体をそれぞれ点検するように全身をくまなく、頭の中で理解してから、身体を起こす。大きく息を吐くと、喉の渇きを覚えた。
「……おかしいな。転送したところまで記憶があるのに」
なぜだか、自分が眠るまでの記憶がない。
どこまで回帰してもあの光に自分が飲まれるまでの意識しか存在せずに、それ以降が見当たらない。ついに何らかの影響で記憶障害を引き起こしてしまったのかと不安に思うと、レックスがそれに補足した。
「キミはあの後、すぐにエミリアに寄りかかるようにして気絶したからね。聞く話によると、右目の限界が過ぎたせいらしいけど」
寝癖で逆立つ髪をそのままに、衛士は気だるげに再び寝転がった。
右目は常に閉じているクセのせいで気づかなかったが、眼帯はモスクワに捨てたままだったことを思い出した。つまり今、能力を発動させて眼を開けば、眼帯という障害が無いせいで発現してしまう。
別にどうということではないのだが、割合に長い付き合いになっていたアレを失うのは少しばかり物悲しい気がした。新しい何かを買おうにも面倒だ。医療用の眼帯でも、適当に仕入れようか。
「お前はなんでここに居るんだよ」
「衣食住を提供してくれるって言われて、案内されてここに来ただけだよ」

「……それで、アンタは機関に手を貸すのか？　正直な所、あまり関わらないほうがいい」
「あはは、キミが勧誘しにきたんだろう？」
「ありゃ仕事だからな。建前と本音は真逆だ」
「ま、戦ってる姿みれば大体わかったけどね」
戦う目的は、己の復讐のため。
そのために機関を利用しているに過ぎないというのは、わざわざ彼が激白するまでもなく明らかな姿だった。
――にしても、と衛士は嘆息した。
自分が強くなったと思っていた。
限界など知るかと思っていながらも、無意識の制御のせいか、透視能力を使おうという発想すらなかった。アレさえあれば、時間をそう使わずに敵を殲滅できたはずなのに。
自分の力というものに自信が持てない。
勝てると言い聞かせるだけで、自分が自分の力でそうできていると思い込めない。
敵を殺せるのは単なる幸運で、自分が生きているのはそういう運命だから。衛士は、思い返せばこの機関というものに来てからずっとそうだったような気がした。
次の任務が無いなら、またハーガイムに鍛えてもらおう。今度は妙な心配をされないように、適度に、技術面をくまなく。
「はあ……レックス、アンタは結局強いのか？」
「何を突然……どうだろうね。神様にでも生かされてるだけじゃないか？　まあ、土壇場に強いって良く言われるけど」
「くそ、天才タイプか」
「そういえばエミリアがこれまでの医療費を口座から差っ引いとくって言ってたけど大丈夫なのかい？」
流れるように話を転換するレックスだが、そんな不意な話題に衛士は反応する。
そういえばここ最近カネに手をつけていなかったから、入院費や

ら何やらが一体どうなっているかわからなかったが、今まで機関が払っていてくれたのかとようやく理解する。と同時に、その料金がどれほどのものなのかと気になった。
「いくらぐらい？」
「そうだな……ざっと二〇〇万くらいって言ってたけど」
「うわー、すごいボッタクリ」
最大で一千万を予想していたお陰で傷は浅い。
一ヶ月ほどの入院に、義指だ。さすがに安いとは思わないし、普通とも思えないが妥当なところだろう。
「……今日は何か言われてたか？」
「ああ、仕事とか？　特に何も。何かあるときは人が来るらしいよ。あ、そういえば暇だったから洗い矢とかガンオイルとか、色々借りてボクのとキミの火器類をメンテしておいたよ。ロッカー無いから、壁に立てかけといたけど」
「マジか、ありがとう。分解は？」
「いや、さすがにそこまではしてない。自分のはやったけど、狙撃銃って繊細だし。組み立てた人によって変わるからね」
「ホントに助かる。そう思うと色々と申し訳なくなってくるな。勝手に巻き込んで……」
そうだ。
勝手に巻き込んで、人生が大きく変わる。
自分がそうだった。だからせめて、そういったことだけはしないようにと思っていたのに――。
衛士は身体を転がして、壁を向いた。
テーブルに付属する椅子に腰掛て足を組むレックスに背を向ける形になったが、彼は特に気にした様子もなく、カップを口に運んだ。
「そういう事はあまり深く気にしないほうがいいよ」
「ああ、そうだな……」
ミシェルもそうだった。
今の自分と同じような気持ちを、ずっと消えることも忘れること

もなく抱いていたのだろうか。
そう思えば、なかなかに辛かっただろうと思う。
だから、あの時の自分の行動は正しかったのかもしれない。今も、目覚めて自暴自棄になっていた時も接してくれたのを思えば、確かにそうだと思える。それに加えて彼女がやさしいこともあるのだろう。
良い人ばかりに恵まれた――それと同時に、何か、大切な事を忘れているような気がした。
なんだろうか。
疑問に思い、記憶の海に潜り込む。
そうしようとした刹那に、来訪を伝える玄関チャイムが音を響かせた。

「……ホロウ・ナガレが、オレに？」
「ああ。そしてまた一つ、不穏な空気があってな」
エミリアは、レックスが差し出したコーヒーを含み、飲み下す。
衛士は寝台に座り、椅子に腰掛けるエミリアに視線を投げながら、渡された手紙の封筒を一瞥した。
ホロウ・ナガレは協会の創設者だ。そして特異点と呼ばれる、唯一成長性を持つ特異能力を持つ存在であり、数年ほど前に機関を脱した男である。
協会の目的は機関の妨害であり、最終的には機関を壊滅することだ。
そしてホロウ・ナガレがそうする理由は、未だ判明していない。
そもそも彼の出自も不明であり、機関にはいる前は一体どこで何をしていたのか――それすら分からない。
適正者として勧誘された男だが、既にその時点で特異能力を有していたのではないかという可能性すらあるが、それは飽くまで可能性に過ぎない。そしてまた、だからどうというわけでもなかった。
「ドイツに協会の姿を見たとの事で様子見に行った際に接触し、こ

の手紙を渡されたわけだが……セツナが居たらしい」
「セツナ……って、あの石膏仮面の？」
「やはり知っていたか。『我の名前を出せば分かる』と言っていたが……そいつから言伝だ。『お前の判断が全てを決する』らしい。随分と、私の知らないところでお前の存在は大きくなっていたようだ」
「……なんつーか、オレが何したって話だよ」
「さあな。その能力（ちから）が欲しいんじゃないのか？」
「迷惑な話です。殺しあった仲だっていうのに……」
セツナという男。
彼が協会に深い恨みを抱くきっかけとなった作戦に参加していたが――なぜだかその時、命を守ってくれたことがあった。だから心を許しているというわけではないのだが、殺すべき人間の中には入っていない。
なんらかの形で、協会や機関とは全く関係のない場所で生きていて欲しいと思うだけだ。
衛士は内心にそう漏らしながら封を開ける。
中から引き出す便箋は一枚であり、封筒の中にはそれだけが入っていたようだった。
「本当に手紙だな……」
レックスが関心があるように手紙を見つめる。
機関のある程度の情報を受け取った彼にとって、機関にとってもイレギュラーであるこの接触は非常に興味深いものだろう。この内容によって、また自分がどこに行くべきかを決めることになるかもしれない。
もっとも、既に気持ちは固まっているから、相当のことがなければ気持ちは揺るがないのだが。
「えーと、なになに……？」
広げると、その味気ない便箋には小さな文字が列の最後まで書きこまれていた。それに少しばかりげんなりして紙を近づけ、凝視す

る。それから衛士の表情が強張っていくのを見て、彼らは内容を推して量った。
「あー、ひでぇ話だなこりゃあ……どうなってんだ？」
誰にともなく独りごちる。
これがまずはじめにエミリアの手に渡ったのならば、恐らく彼女の配慮から中身は確認されては居ないのだろう。もっとも、こんなものが衛士以外の眼に入れば、確実に彼のもとに届くことはなくなる程の内容だった。
一通り目を通し、理解する。
衛士はそうしてから深く嘆息して、便箋を封筒に戻す。
「口外出来る内容か？」
エミリアは問う。
衛士は少し考えてから、眉間にシワを寄せ、困ったような表情（かお）で頷いた。
「簡単に言えばそうだな、まず一つが――」
「ちょ、ちょっと待って」
「ん、どうしました？」
「一つって、紙一枚にいくつ内容が書いてあった？」
「二、三程度ですかね。……あ。良い報告と悪い報告、どっちから聞きたいですか？」
「そういうの良いから」
彼女は意気込むように、コーヒーを飲み下す。それから胸の奥から息を吐いて、衛士へと向き直る。
レックスは頬杖を付いてまさに他人ごとだが、視線は彼へと向いていた。
じゃあいいか？　と衛士が問えば、二人はそろって首肯する。
「まず一つ、『ドイツの機関が協会の手に堕ちた』。きっかけは、オレが特異点を勝手に殺したからだそうだ。おかしな話だよな、向こうから依頼があったとか聞いたのに」
「……それは、オモシロイと思って言ってるのだとしたら一度思い

切り殴り飛ばすぞ？」
「そう言いたいのは山々ですが、分かってますよね？　話を聴いてください」
「うそ、だろう？」
「少なくともこの手紙に書いてあることが全て真実なら、本当なんでしょうね」
顔の前に封筒を持ち上げてアピールする。
彼女は、にわかには信じられないという面持ちで、されど驚きを隠せずに目を見開く。焦点は合わずに足元へ、そして窓の向こう、天井とを行き来する。
確かに信じられない内容だと思う。そしてこういった動揺や疑いを持たせることが、彼らの作戦なのかもしれない。だが、だとすれば何故わざわざ衛士にそれを渡せと命じたのかという疑問が残る。
「『時間操作という技術を持っていて、なぜ未来から人が来ないのか、と疑問に持ったことはないのか？』と書かれている」
「どういう意味だ」
「なぜ、ナガレが機関を去って、機関を潰そうと画策しているのか。そして僅か二、三年で、なぜこれほどまで手際よく付焼刃（スケアクロウ）という存在が生まれたのか……オレは知りたくはありませんけどね」
「……っ！」
衛士は続ける。
これが最後に綴られている内容だ。
「”お前は誰かを守りたかったんじゃなかったのか？”　というのがオレに対する言葉です」
「キミは、その意味がわかったのかい？」
「ああ、身にしみるくらいな。オレは今から一週間後、ドイツへ飛びます。不安だからハーガイムさんとスコールにもついてきてもらいます」
そして今日から一週間の間は、ハーガイムにみっちりと鍛えてもらうことにしよう。

場合によっては、狙撃技術を鍛えてくれたヤコブもつれていくことにもなりそうだ。
「ドイツへ行ってどうするつもりだ」
「オレは連中に合わなければなりません。今まで戦った協会よりも、まだまともな連中に」
「罠だろう？」
「だとしても。行かなければ何も始まらない。実際にドイツがどうなっているか確認する必要があるだろうし――心配なら、今回みたいに転送で助けに来てくれるんでしょう？」
引きつったような笑みを見せると、釈然としないようにエミリアが首を振る。
「血迷っている！　そんな手紙を……」
信じるのか？　口にしようとして、思わず止まった。
信じるも何も、ようやくして伝えられたその内容には信じるも何も、ドイツの機関のくだり以外に何かを伝えようと意図しているものはない。
そしてまた、エミリア自身が思わず反応してしまったこともあって、強く出ることが出来なかった。
「協会が動いているんです。誘っているんでしょうが、少なくともこの手紙が来たということは、そういうことです。均衡状態だったのに、協会が動いた……これは機関が対応すべき機会だ」
何かが――決定的なまでに変異する。
そういった予感がする。
とてつもなく悪い予感だ。直感に過ぎず、信ぴょう性や何やら以前の問題だが、こんな所で留まっている理由はない。
衛士は立ち上がって、手紙をテーブルに置く。それと共に、壁に立てかけられた狙撃銃を肩に担ぎ、足元の机から部屋のカギを取り出した。
「オレは訓練所に篭ります。ハーガイムさんの都合があえば、彼と」
それから、と、カギをレックスの前に落とす。しかし彼は、衛士

から視線を外さなかった。
「部屋は好きにしていい。戸締りはくれぐれも気をつけてな」
「おい、エイジ！　任務の命令はまだ無いし、あったとしても貴様が選ばれるとは限らないぞ！」
「そうなった場合は、ここがどうなるかわかりませんけどね」
「……そうか。ナガレはこの位置を知っているのか……」
「ええ、それじゃあ」
「おい、待て……！」
手を伸ばして腕をつかもうとするエミリアを避け、制止もきかずに衛士は足早に部屋から出ていってしまう。
二人はその姿を為す術もなく見送ることしか出来ず――ややあって、エミリアは手紙に手を伸ばした。
そしてその内容を拝見して、絶句する。
この内容をよく掻い摘んで説明できたと感心できる言葉が並ぶ。それを見て、また協会が動いているとがどうしようもなく確信できて……。
ポケットの中で、通信端末が着信を告げるように電子音を鳴らした。

## 再訓練

「だから言っているだろうがッ！　貴様は基礎だけを覚えてこのくそったれな世の中を生きていくつもりかァッ！」
ハーガイムの強烈な打撃を頬に受けて、尚それでも動じずに大地を弾くように後退すると、そのまま反動を地面に受け流して時衛士はゴム製のナイフを構え直す。
「一からやり直したくなかったら本気を出せクソ野郎ッ！」
「サーイエッサー！」
「ふざけるな、大声を出せ！」
「サー、イエッサーッ！！」
最小限の動作で足を動かし、負担を抑えるようにバネを縮め、反動を利用して前へと進む。やがて眼前に迫るハーガイムの腕が殆ど反射的に撃たれるのを視て、衛士は身体を捻り紙一重で避けてみせた。
左腕の外側に回りこみ、逆手に握るナイフを鋭く彼の脇下へとえぐり込む。が、強引なまでな力技で返す肘鉄が、予期し得ても尚反応を超える速度で眼前へと肉薄した。
衛士はそれを利用し、肘に手を沿わせるようにして腕に弾かれ、その勢いのまま背後に回りこむ。ナイフで斬りつける横腹から背中にかけては鈍く摩擦するが、手応えは甘い。
――決定打を打つまでは無傷。
今回の格闘訓練はそういった決まりの元で行われていた。
「貴様はその程度の斬撃で人が死ぬと思っているのかァッ！？」
身体は深く沈み、振り向き様に足払いを薙ぐ。同時に衛士は短く跳躍し、自ら向かってくるハーガイムの顔面を掴むとそのまま膝に叩き込んだ。
が、その瞬間。
鈍く、力強く顔面を穿つ膝を裏側から抱擁するような腕が伸びる。

衛士がそれに対応する暇もなく彼は身体を起こすと、片足を払う形のまま、屈ませる足を伸ばして立ち上がる。衛士の体勢はされるがままに仰け反り、両足を脇に抱えられたまま、その頭は地面すれすれの位置で停止する。

握るナイフを振るう事無く、体を捻り、また体勢を整えながら振り返るような動作をするハーガイムによって、衛士はそのまま彼を中心点にして、空中を激しく回転する。凄まじい遠心力に増幅する重力を肉体に負荷させた。内蔵が位置を揺らしてずらし、喉元からせり上がって口から吐き出されそうになる。

そんな中で不意に、彼を唯一固定する腕から力が抜けた。

程なくしてハーガイムから解き放たれた衛士は宙を滑空し、大地に背中を叩きつけられた。

肺から空気という空気が吐き出され、衝撃が肉体を打ち、脳を揺さぶる。それでも身体は脊髄反射をするように体勢を整え、半ば無意識に彼は再び立ち上がっていた。

「そうだ、ガッツを見せろ！」

「サーイエッサーッ！」

今度はハーガイムの接敵を待つ。

大きく息を吐き、だが体力の回復を待つほどの甘さを彼は持っていない。

僅かな均衡に、半ばクセのように息を吐いたことを確認した瞬間に、彼は大地を弾いて衛士の胸元に飛び込んだ。

僅かな驚愕。

乾いた喉が張り付き、反射的に立ち向かおうとする体勢を強制的に射に構え直した。

ハーガイムの魔手が迫る。

眼前に迫る指先を、その寸でのところで掴まんとしていた腕を引く。そして虚空を掴み拳を作る腕は、臨機応変に打撃へと変異するが、衛士は袖を掴み、力一杯振り下ろした。

全体重を掛ける不意打ち気味の行動により、ハーガイムは深い前

屈姿勢になるが――早くもその馬鹿力が、衛士の体重を持ち上げんとする。
一閃。
その抵抗が完了する間に放たれたナイフは、鋭くハーガイムの頚椎を突き刺した。

『違う、殺すんじゃなくて止めろ。お前の存在は完全に土と同化する。意思すら持つな。お前はただ引き金を弾くためだけの装置だ』
「了解」
訓練用の森の中。
五分ばかりの休憩を次の訓練の準備に費やした後、間もなく彼はギリースーツに、迷彩ペイントでカモフラージュされた半自動消音狙撃銃（トレス）を渡され、インカムを装着する。
それから教官役となる巨漢の男が先に森の中に入り、一二〇秒が経過した後に、後を追うように衛士も続く。
森は円形からなり、ドーナツのように中央に空間を開ける。そうして森の部分は、直径で約一キロほどの距離を持ち、鬱蒼（ヴィン）と生い茂るその中には獣道すら無い。
今回の訓練は、敵に見つかるよりも先に敵を見つけ、狙撃すること。
渡された弾倉には僅か三発ばかりの弾薬。これは二回までのミスが許されるという、ヤコブなりの最大限の配慮である。そしてまたインカムを渡して助言をしながら、己の技術を叩き込んだ弟子とも言える少年に狙撃される自身は無いという心情を表していた。
『言っておくがボクも容赦しないからな？　お前を見つけ次第こちらも狙撃する。ハンデは要らないから、クセを見抜いて見つけ出せ』
「了解」
中腰のまま、草に紛れて前へ進む。
息を殺し、視界に入る全ての景色に集中する。動く陰、異変、注

意点、この場所を狙える場所、この場所に居る敵に対して動きやすい位置……その全てを把握し、理解し、また前進。
身体の輪郭を草木に同化させながら、衛士はやがてほふく体勢になった。
音を立てず、ほふくといえども膝、肘を立てた形だ。極力動いた痕を残さぬように、器用にそれらをかき分けて進む。
――依然として、ヤコブの気配はない。
どれだけ周囲を、幾度ともなく確認してもそこには居ない。
仮に居たとしても、果たして本当に気付けるのだろうか。
まず狙撃が成功するか否かの段階ではない。
敵が発見できない。それ以前の、第一段階未満の、スタートライン。よーいドンのピストルが鳴っても尚、準備段階から走り出せない。競争相手は既に走りだせている。その贅肉に包まれる巨躯など嘘のような軽やかな身のこなしで、通った形跡すら残さず、ヤコブは完全に同化(きえ)ていた。
『まだ見つからないのかまぬけ』
余裕綽々の威圧(プレッシャー)が耳から抜けて下腹部に落ちる。
衛士は細く息を吸い込むと、一度だけ眼を閉じた。
戦場では死を意味する油断。彼は敢えてそれを行い、次の瞬間には再び景色に配慮する。
「いや」
その刹那に、衛士は額から零れて頬を伝い顎から滴る汗を感じながら、続けた。
「見つけた。そのでけえケツを」
どこを移動しても景色の変化は望めない。どこをどう見ても、先ほどの森と、先ほどの位置と何が変わっているか述べられない。
だが衛士は既にその時点で、とある領域に目星をつけていた。
それは広場に極めて近い位置だ。除草剤でも蒔いたように、しっかりと草木と土との境目がはっきりしている場所。そして、それゆえに草木の薄いカモフラージュには適していない、隠れる場所もそ

う多くはない場所。
ヤコブはそのわがままに太りきった肉体に反し、己を追い込む性格である。
いわば、極地であれば極地であるほど集中力は増して狙撃に対する才能が増幅する。その中で、弾道を読み取る力は随一のものだと言えた。
彼にとって、集中力や注意などが確かに敵の発見を助ける力となるが、それよりも一番敵を発見、あるいは敵の位置を大まかに認識する要因となるのは”直感”だった。
長年の経験。無意識に感じる気配。自分を最も狙いやすい位置。少なくともその三つで敵の潜伏位置を割り出す男は、さらに敵により発見され易く、それでいて不自然でなく、また後手に回る事無く先手を打てる場所――そこを望む。
二ヶ月間に及ぶ、実践を交えた休みのない訓練の中で覚えたヤコブの全体像は、そういったものだった。
そして今、その全てを教えてくれた師とも仰げる男と対峙している。
「随分と口数が少なくなりましたね」
『僕は完璧主義者でね。お前を見つけるより、まず居ないという領域を徐々に潰していきたいんだ』
「その気持ち、分かりますよ。ゲームでもボスより、周りの雑魚から倒すタイプでしょう？」
『……お前とチェスをやって勝てたためしが無いんだけど』
「将棋でも負けナシですよ」
『まあいいや、コレが終わればまたやろう。一度勝ってみたいんだ』
「コレが終われば、すぐにドイツに飛びます。帰ったら相手をしますよ」
『そん時はお手柔らかに頼むよ』
意気揚々にヤコブは笑い――衛士は前進をやめる。
彼は注意していた境目に、ほんの僅かでありながらも、落ちてい

る枝が不自然に折れて、その先端が何かに隠されているような光景を、遙か手前で発見する。注意しなければ、あるいは注意しても気付けるか否かの、極めて些細な点。それは恐らく折れた枝の先がギリースーツの中に隠れているからなのだろう。

彼はそこで息を止める。

身体を、その境界面の発見位置から、やや東の方向へと、徐々に変えていく。音を立てぬよう、気配を出さぬよう、数秒に一ミリほどの、慎重すぎるほどの行動で、十数分が経過した頃に、ようやく彼は背を向いた。

そこはちょっとした丘になっている。

そこは絶好の狙撃ポイントの一つであり――されど、丘の上には何も無い。

綺麗に葉が落ちて並び、枯れ木が風景の一部として目立つだけのなんともない場所。

衛士はそこが辛うじて見える位置でようやく動きを止めて、伏射姿勢。

備え付けの光学照準器を覗き込み、ある違和感を探す。

丘の上。その向こう側の、ちょっとした斜面にある違和感。隠蔽工作では無い自然の違和感。

それから程なくして衛士は引き金に指を掛けた。

――向こう側に落ちる斜面。そこにある、葉が異様に盛り上がっている部分を発見した。

森の中に風はない。

弾道は、予測するに土手っ腹に向かうだろう。

息を止める。

その時点で、全ての思考を一時的に放棄する。

発砲。

ぶしゅん、というくぐもった発砲音の直後に、その奇妙な盛り上がりに赤いペイントが華を咲かせた。

一週間、およそ一四〇時間に及ぶ総仕上げ的な訓練は、狙撃成功を最後に終了を告げた。
ちなみにこの訓練の中で衛士はハーガイムに一五四回殺され、逆にハーガイムは衛士に十八回殺された。また三十回中ヤコブの狙撃は二十九度成功し、全てが一発で衛士を射ぬいている。最後の最後でようやく仇を討つ形となったが、それまでの、一度の潜入でそれぞれ二発づつを使い切っているから、そうそう褒められた出来では無かったが――。
「いや、最後は流石に負けたって思ったよ。なに、五〇〇メートルくらい離れてたんじゃないの？　あれ」
ヤコブはコーラのペットボトルを飲み干してから、袖口で額の汗を拭う。
ギリースーツを脱ぎ捨ててもまだ目立つ顔のペイントは、やはりシャワーでも浴びなければ落ちそうにないと、衛士は彼を見ながらそう思った。
「いや、四五〇メートルぐらいですかね。ぎりぎりでしたよ。多分、アレ以上近づいてたらバレてただろうし」
「でも、これで本当に、もう教えることはないよ。だって今回の再訓練じゃ、一回も手を抜かないで、本気で生き抜く自信あったもん」
「正直な所、わたしもだ。能力まで使って殺されたから、ヤコブ以上に立つ瀬がない」
ハーガイムは冗談っぽく笑って、ジンジャーエールを喉を鳴らして飲んでいた。
彼らはそれぞれ、屋外訓練場と訓練学校とを隔てるような階段に並んで座り、休憩とばかりにだべっていた。
時刻は深夜十二時を回る所だ。
ドイツの時間で午前四時に転送が開始されるから、一時くらいに家に付けば、長くで十時間ほどは眠れるだろう。が、休みのない訓練続きで、容赦のない、全てが全力投球の訓練のお陰で肉体の疲弊

度はこれまでの比ではない。
おそらく、死にかけたほうがまだマシだと思えるレベルだ。
――衛士は衛士で、クーラーボックスから取り出したオレンジソーダを口に運んで、深く息を吐いて脱力する。
「一度だけじゃないですか。しかも予知できたから逆に利用しただけで、あれ以降、能力に勝てた試しがないし。卑怯ですよあんなの。勝てるワケ無いじゃないですか」
既に還暦を過ぎているにもかかわらず、コレほどまでの運動能力に身体能力を残し、またそれまでの経験や感覚を全て残しているというのは異常すぎる。これもなにも、特異点という存在ゆえになせる技なのだろうか。
さらにヤコブだ。まだ三十路前だというのに、狙撃技術は完成されている。才能という言葉を使わなければ説明できない技術だ。もっとも、そう言えば衛士とて天才ゆえと言わざるをえないのだが。
改めて戦って、この一週間で身に染みた。
この二人が仮に敵に回ったとしたら、戦う前に心が挫けてしまうかもしれない。
「さて、と」
休めば、身体が異常重力に飲まれたかのように重くなる。膝が、というよりは全ての細胞が小刻みに震えて、己の体重すら支えられない。衛士はそれを気合で乗り越えて、ようやく立ち上がった。
「明日から任務なんですから、二人も休んでくださいよ」
そういった言葉に、ハーガイムは少し困ったように肩をすくめた。
「あー、その話なんだがな」
口ごもる。衛士がそう認識する前に、ヤコブが続けた。
「僕達は明日、アメリカに戻るんだ。本当はずっと前に戻れって言われてたんだけど、お前……君のために滞在を許可してもらってた」
「か、帰るって……」
今生の別れみたいな言い方に、衛士の胸は思わず高鳴る。
神妙な顔つきに、嫌な予感――それこそ衛士の恨みの根源となる

肉親の死が、重なって仕方がなかった。
「もう、ここには帰ってこないんですか？」
「いや」
すかさず、ハーガイムが首を振る。
「そういうわけじゃないよ」
「ドイツが乗っ取られたって話だろ？　アメリカは軍どずぶずぶだから問題はないが、何が起こるかわからないから待機してろと命令されてな。だから残念だが、ドイツの事がどうにか片付くまでは戻ってこれないかもしれない」
「ま、君が帰ってくる頃には、帰ってこれる……だろう？」
「……オレはただ協会の連中に接触するだけのつもりだったんですが、まあ、いいですよ。スコールと、あと二人の埋め合わせが出来るやつを連れて行ってきます。とても独りで出来る任務じゃないですから」
意思のこもる瞳で両者を見つめれば、ハーガイムは気だるそうに立ち上がり、ヤコブは溶けてしまいそうだった肉体を維持して腰を持ち上げた。
二人はそれぞれ手を差し出す。
衛士は微笑んで、それに応じた。
「結果次第じゃ、イヤでもまた訓練をつけるからな？」
「はは、受けて立ちますよ」
「帰ったらチェス、忘れるなよ」
「待機中に少しは鍛えててくださいよ？」
これからの任務に対する激励は無く、あくまでこの非日常の中の日常を演出するように、なんでもないように二人は告げる。
それぞれはややあってから合図もなく、解散となった。
――機関を、協会を、それを括る世界が大きく変異する任務の始まりは、それから約十二時間後のこととなる。

**嵐の前の**

「まだ目が醒めないんですか？」
そう広くはない病室には、寝台が一つだけ配置されていた。
薄暗い、まるでそこが病室として使用されていないような殺風景さを持つ空間には、されど心電図と、脳波計だけが定期的に無機質な電子音を鳴らす。
「それでも、少なくとも今は仮死状態じゃない。以前の君のような状態だ。君が目覚めてからね。なにかが影響しているんじゃないかな」
白衣を着こみ、小脇に書類が固定されているクリップボードを抱えて、医師が告げる。
「もしかすると、そろそろ目を覚ますかもしれないね」
顎鬚を蓄え、特徴的な丸メガネをかける彼は穏やかな笑みを衛士に向けた。
午前九時。まだ彼とて忙しいであろう時間帯なのにも関わらず、彼はわざわざ衛士に対応してくれる。機関内の施設だから金を掴まされているというわけではないのだろうから、単に親切なだけなのだ。
彼はそれだけ言うと、彼は白衣を翻して寝台に横たわる少女に背を向ける。それから間もなく衛士の脇を抜けて扉まで迫ると、そこで一旦足を止めて、振り向いた。
「君も仕事があるんだろうが、出来るだけ見舞いに来てくれた方が嬉しいな。気のせいかもしれないけど、君が来た時のほうが容態は落ち着いてるんだ」
「そうですか」
「ああ。それじゃ、ゆっくりしていって」
男はスライド式の扉を開けて、退室する。
残された衛士は、穏やかな寝顔を見せる少女――ナルミ・リトヴ

ャクを見下ろした。
彼女は命をたすけてくれた恩人だ。さらに、酷く好意を持ってくれた女性でもある。衛士を助けるために無理をしたせいで現状に至り、ゆえに彼はいくらかの責任を抱いていた。
作戦開始までまだ三時間。準備を含めればあと二時間だけここに居られる。
だからその分だけ、衛士はここに居ようと思った。
今回の任務は普通に終わる気がしない。そもそもドイツの機関が陥落して、これで世界に対する脅威というものが一つ減ったわけだ。そして機関というものが、そもそも人の手によって墜ちるということが判然とした。このあまりにも有利ともとれる現状で、世界――つまり米や欧米諸国、露中が動かずにいられるだろうか。
否、その疑問は愚かと思える程に簡単に解ける。
だからこそ、こういった機会はもう無い気がする。
考えていると、特殊防弾仕様のコートの内ポケットから通信端末が着信を知らせる電子音を鳴らすのを聞いた。
「む……」
取り出し、応答する。
一拍置いて、声が耳に届いた。
『貴方はどういった武装でいくつもり？』
アイリンは挨拶もなしに、単刀直入に訊いてくる。
どういった武装と言われても――支給品はあっても弾薬のみ。銃器は、持ち合わせがないときにアサルトライフルと自動拳銃が支給されるが、既に持っているからそれは不要だった。
衛士はコートの開いて内側に収まっているブッシュナイフを確認してから、病室の隅に馴染みの狙撃銃『Ｍ７００』と、Ｍ４カービンの改良、強化が施されたカービン銃『ＨＫ４１６』の、狙撃銃と同じ弾薬、７．６２ｍｍが採用されたモデルが壁に立てかけられている。
さらにチェストリグには十キロに及ぶ弾薬、弾倉が詰め込まれて

いる。近くには銃器を隠蔽するための二重の層になる細長いアルミ製のアタッシュケースがある。
拳銃は使い慣れた９ｍｍ拳銃が腰のホルスターに収まっていて――装備は以上だ。
衛士が簡単にそれらを説明すると、アイリンは「そう」と短く返事をした。
『訓練の方はどうだったの？』
「まずまずです。少なくとも、あの二人以上に強い敵が来なければオレが負けることはないでしょう」
『へえ、随分な自信ね？』
「ええ。この僅かな期間で、オレも随分考えが変わりました。いや……これまでを考えれば整ったと言えるでしょう」
協会を潰すことばかりを考えていたが、それだけではいけないことを理解した。
強くなり全ての障害を排除する事だけを望んでいたが、それだけでは何も生まれないことを認識した。
そして今回の任務で、何かが変わる。自分だけではなく、それを取り巻く環境もその全てが。
「それで、そっちの方はどうなんです？」
『こっちが……何かしら』
とぼけたような声で聞き返す彼女に、衛士はわざとらしく嘆息した。
「今回の任務にあたって追随する仲間です」
『あら、いつもは一人で大丈夫だって気張るから、今回もそうだと思ってたのに』
「……その節は、すみませんでした」
『いいのよわかれば。大丈夫、安心して頂戴。例の耐時スーツも完成したし、その実用テストも兼ねるけどいいわね？』
「かまいません」
『それじゃ、十一時に研究所だから。準備を整えてきてね』

「了解しました」
衛士は端末の通信を切り、ポケットに収める。次いで寝台に一歩近づくと、衛士はそのまま彼女の顔の近くで屈み込んだ。
手を伸ばし、まぶたにかかる前髪を掻き上げて額をのぞかせる。
衛士はその額に唇を近づけ、刹那的にくちづけた。
「それじゃ、ナルミ……機関を任せたぞ」
――銃器を簡単に分解して、下の層に狙撃銃を、上の層にカービン銃を収めてアタッシュケースを締める。コートを脱いでチェストリグを着こみ、コートを着こみ、ずっしりとした重さを感じながら衛士は、扉に向かう最中に一度だけ彼女を一瞥してから、そこを後にした。
彼女の脳波が著しく反応し始めたのは、その直後のことだった。

「あたしたちも、ただこの一週間を無為にしていたわけじゃないわ。だってそうでしょ？　貴方が言うとおり、今は大変な時期なのだもの。アメリカの機関だっていつまでもつかわからないし」
楕円形のテーブルだけがあるそう広くはない空間。そのブリーフィングルームに、今回選ばれた男達は集まっていた。
「ちょっとまってください。アメリカの機関が……どうしたんですか？」
アイリンは衛士の正面の席に腰掛け、右脇には白い短髪を逆立たせる、随分と風貌が変わったスコール・マンティアが変わらぬ黒衣をまとい、左脇には黒い詰襟の野戦服のようなものを着こむレックス・アームストロングが座っていた。着心地の悪そうはソレは、恐らく例の『新しい耐時スーツ』なのだろう。
「知らないの？　……そうか、あの二人は大切な事を言わずに行ったんだわね」
「……どういう事です？」
「彼らは元から軍の人間だったからね。三国間に機関があることに

よって均衡が保たれていたのだけれど、その一つが陥落して――その為に機関は無敵ではないことを教えてしまった」
これはもっとも恐れていたことでありながらも、もっとも想像に易い予測できた事態だった。
現状は、彼らが思っているよりもはるかに重く、圧倒的不利な状況で、いつ敵が攻めてきて命を散らしてもおかしくはない状況にある。
ただ一つ、二つの機関ではその圧倒的な抑止力が存分に発揮できない。軍事力が凄まじいから、資産が圧倒的だから世界が追従していたわけではないのだ。
時間遡行技術――ただ一つのそれを目的に、世界は頭をたれて従ってきた。
敵の対抗する力が弱まったと知れば、その弱みにつけこまぬ手はない。
「これまで貴方を育ててくれた事、機関に手を貸してくれた事があるから、彼らの自由にして良いと伝えたんだけどね。結局彼らはアメリカに戻ってしまったわ」
「……米軍を相手にして、機関は生き残れるんですか？」
「無理よ。ただでさえ地上に基地があるんだもの、空爆でイチコロよ。あーあ、あたしも制空権とりたいわ」
「だというのに、割合に呑気なものだね」
そう言うのはレックスだった。
「焦ったって良いことなんて何も無いものよ」
「とは言いますが……大丈夫なのですか？　我々は、この日本の機関だけが生き残って、これから……」
話を聴いて、絶望的な顔をするスコールはテーブルに肘をついてうなだれる。
衛士はそこから、彼の言葉を継いだ。
「つまり上層部の老害共……ゼクトたちはなんて言ってるんです？」
そういった質問に、アイリンは腕を組んでため息をついた。

何かを思い出す、というよりは考えるように額に指を当てて唸る。
「まあ、なんというか」
それからややあって、無理に吐き出すように彼女は口にする。
「なるようにしかならない、としか言わなくて。この流れならホロウ・ナガレが何かを知っていてもおかしくはないんだろうけど……。いや、推測は出来るんだけどね、コレばっかりは、あんまり認めたくないっていうかね……」
「そうですか。まあそもそも、”『時間遡行技術』自体が未来から来たもの”ですしね。上層部が人工知能だとか、単なる情報や信号だけの存在であっても不思議ではないですね」
言ってみると、アイリンは分かりやすくギクリ、と硬直する。
珍しいことに彼女は緊張していて、余裕がなく、それでいて素直に、乾いた笑いを漏らして頬を掻いた。その反応は図星だと言っているようなものである。
「あたし、そんな事言おうとしたのかしら」
「いえ、カマかけてみました。それとオレ自身の考えもありましたし」
衛士は眼帯のない右目を指してから、まぶたを開ける。
眼窩には腐ることのない、されど視神経も繋がっていないし、そもそも己の眼球ですら無い白い眼のそれが収まっている。
――今は亡き姉の眼だ。
これ自体に特殊な力があるというわけではない。右眼窩に生まれた鬼火が、この眼を介して視覚的な超能力を与えるだけである。
「考えたくはありませんが、これまでの事が予定調和だったように思えます」
機関がこういった事になるのは、最初から決まっていた。そんな気がする。
もちろん根拠なんて無いし、知るすべもない。予知といえどもこんな長期間を視ることはできないが――違和感とまでは行かずとも、妙な感覚を衛士は覚えていた。

こんな事が以前にもあったような気がする。
この能力（ちから）を得るよりもずっと前の、この機関に来るための、試練の中で感じた吐き気をもよおす不快な違和感が。
少し考えれば思い出せる悪夢は、頭が痛くなるほどに多い。
その中でも精神的に未熟だった時のそれは、さらに強く胸に刻まれていた。
だからこそピンとくる。
ああ、そうだったのかと理解できた。
確証は無いし、照らしあわせたとしても、あの時の試練と現在とが同じであるわけでもないのだが……否定もできない。それも同じだった。
「予定調和ねえ」
「だがまあ、ボクにはよくわからないし聞いていてもイマイチ理解が追いつかないが……ここで言っていても無駄なことだろう？　話を進めないかい？」
「ですね。それはわたしも賛成です」
そうしてようやく、不鮮明でありながらも何故だか最重要だと言い切れる、曖昧な作戦内容が発表された。
空間内は飽くまで静かで、その機関の未来を決する任務に選ばれた僅か三名の男達は、三者三様の反応を見せて――それから一時間後に始まる任務の準備を開始した。

## 任務：殲滅せよ

陸からやや離れた位置にある孤島は、鮮やかな自然が残り、孔雀などの鳥類が生息する自然保護区だ。直径十キロ程度の小さな島は、いまや観光地となって観光客が溢れんばかりに訪れる場所だったが――そこは数年前から立ち入り禁止区域となっていた。

付近には軍ではない、奇妙な傭兵のような連中が火器を手にして橋を封鎖する。警察や軍もそれを容認していて、結局いままで、観光客はもちろん、地元住民がその理由を知ることはなかった。

「本当にココらへんに来るのか？　そもそも、なんでそんな事が分かるんだよ」

ドイツ、ベルリンの遙か北方の海上。

島の中心には軍の基地程度の規模が展開される建造物が、その孤島には似合わぬ目立つ出で立ちで鎮座していた。

滑走路が伸び、冷え切るほどの寒空の下で、滑走路灯が点滅する。その上を、迷彩服にタクティカルベスト姿で移動する集団は、それぞれアサルトライフルを構えて行進していた。

「そういう技術持ってんだよ。俺たちも苦しめられたんだからわかるだろ？」

「たくチートくせぇ……ま、あとは潰すだけだな。アメリカももう動いてるんだろ？」

「ああ。残るは日本のみ。今回の進撃を防げば、勝ったも同然だ」

「くくく……馬鹿どもが。調子に乗ったその面、叩き潰してやるぜ」

「そうそう。武器隠しても意味ないわよ？」

アタッシュケースを持ち上げてブリーフィングルームを辞そうとすると、アイリンは指で示してそう告げる。

「……まさか？」

「その通り」
彼女の言わんとしていることを察して、彼は肩を落としてケースを机の上に置く。
それから素早く開けると、分解されたパーツを手に手にとって接合。やがてカービン銃が完成し、負紐をつけて脇によける。同じように狙撃銃を組み立てると、衛士は乱雑に二つを小脇に抱えて、アタッシュケースをアイリンに手渡した。
「差し上げます」
「預かっておくから、帰りに持って行きなさいよ」
渋々と彼女は手を伸ばしてそれを受け取る。それからポケットに手を伸ばして端末を取り出し、操作して――それを胸に押し当てるようにしてから、大きく息を吐いた。
「いよいよね」
言ってみると、妙に緊張してしまう自分に気がついた。
こんなの、初めてだ。
彼女が言うと、それぞれは右耳に詰め込んだイヤホンに触れる。コードもマイクも無いソレは、そのまま音声を受信し、骨伝導から音声を発信することが出来る通信端末の一種である。
「転送を開始するわ」
横に並ぶ彼らに、アイリンはそう告げる。
緊張を隠せずに表情を強張らせる衛士らはそれぞれ頷き、胸いっぱいに息を吸い込んだ。
「健闘を祈るわよ」
「ありがとうございます……行ってきます」
そう言い終えるや否や、いつものように、不意なる輝きは部屋を瞬く間に埋め尽くした。

時間遡行技術というものは、ちょっと違う気がする。
衛士はそう思った。

そもそも機関が会得したのは、重力子という重力を司る素子を利用する技術だ。それを効果的に使用して完成したデバイス、あるいはハードウェアを利用して世界に物理的に干渉する。
そこから全てが始まったのだと彼は考えた。
時間を巻き戻すだとか、未来へ向かうだとかの事象はそういった装置による効果の一部に過ぎず、そこは飽くまで過程にすぎない。
ならば機関はこれより何を望むのか。
世界を掌握し、その先に何があるのか。
何を掲げ、何を目的にここまで来たのか。
果たして世界から淘汰された、打ち込まれた出すぎた杭には最終的に何が残るのか。
残った構成員は、全てを失ってどこへ去っていくのか。

――レックス・アームストロングの、最終進化と銘が打たれた耐時スーツは、これまでの『副産物』の全てを込めた装備だ。
漆黒の戦闘服。継ぎ目はなく、どこから着たのかが気になる一着だ。
肩に、肘に、胸、膝にそれぞれ対になるコンデンサのような突起が備え付けられている。武装は肩から下げる、突撃銃のフレームを鉄骨で構成したような、巨大な銃とすら言えぬ鉄塊。だがそれは確かに銃の形を作り、また背負うバックパックの中身は、手のひらサイズの徹甲弾だ。
スコール・マンティアは手ぶらだが、その身こそが一番の武器になることを衛士は知っていた。
ちょっとした現実逃避をする時衛士の肩を叩いたのは、レックスの方だった。
「道を切り開くか、ここで敵を殲滅していくか。キミが好きな方を選んでくれ」
そこは滑走路のど真ん中だった。
転送されてきたゆえに、瞬間的にその姿は現れたのだが――三人

を囲うような陣形は、すでに出来上がっていた。
何重にもなる輪。敵は野戦服に覆面、ヘルメットを装備した姿で突撃銃を構えていた。
先読みされていた、と考えるのが妥当だ。
ここはドイツの機関だ。それが出来ても不思議ではない。
「馬鹿が、敵地のど真ん中に来やがって。死に値する馬鹿ばっかだ」
誰かがそう言った。
挑発でもなんでもない、ただ思ったことを口にしただけのような台詞だった。
その中で、レックスは親指を突き出して右肩の突起を押し込んだ。
カチリと音がして――びくん、と、彼の身体は弾むように勢い良く背筋を伸ばした。
ばちりと火花が散る。そう認識した直後には、既にその肉体からはバチバチと青白い電撃が迸っていた。
「さて」
重そうに、レールのような構造を作る銃を手に取り、腕ほどの長さを持つそれを構え、バッグパックから徹甲弾を取り出した。鉄塊にソレを押し込むと、その銃は瞬く間に凄まじい磁力を帯び始める。
「エイジ・トキ。キミはどうしたい？」
軍は結局機関にその指揮権を渡さなかった。
それが普通の考えだ。
国は、それ故に国たりえる。いくらどれほどの力を持っていようとも、どこから来たかもわからぬその組織に、どれほどの手助けを受けたとしても、軍権は渡さない。
だからこそアメリカの機関は米軍に責められているし――だからこそ、衛士らは何の心配もなくここに乗り込むことができていた。
掃射の音は、気がつくと空気をつんざく勢いで周囲から巻き起こっていた。だが銃弾が彼らを射ぬくことはもちろん、愉快で小粋なダンスを踊らせることも決して無かった。
スコール・マンティアは両手を広げて集中する。そうすると、全

ての弾丸は彼らを中心とする半径二メートル程度の虚空で、動きを止めてしまっていた。
そうする事が可能な特異能力『空間掌握（じんつうりき）』。それが彼の強みだった。
時衛士は彼らに置いてけぼりを食らわぬように、ショルダーバッグのように掛ける負紐を外し、背中で交差する二挺からカービン銃を手に取る。
その頃になると、レックスの身体中には青白い電撃がまとわりつき、コンデンサ同士がバチバチと電気を迸らせて、線を繋げるように可視させていた。
「スコール、アンタとオレはレックスの後ろ……少し左脇に跪いて待機。レックスはいつでも発射できるように頼む」
「オーケー」
「わかりました」
最初の弾薬を薬室に送り込み、衛士は膝をついて背後を向く。弾丸は、まるで何かの冗談のように――少し前に見た映画のＣＧのように、その弾頭をこちらに向けながら、既に百に達する数で空間を埋めていた。
スコールがすぐ後ろについたのを確認して、衛士は叫んだ。
「殺せッ（ファイア）！」
空気がすり切れるような、凄まじい摩擦音が空間に響いた。
頭がおかしくなりそうな電圧が周囲に干渉し、彼らは思わず目眩を覚える。その際に緩んだレックスの超能力は、弾丸に貫かれて、途端に彼らの元にまで銃弾が交差し始めた。
だが、彼らに直撃するそれらは無い。多くは掠るだけであり、敵が目的とする決定的な銃殺は行われない。
その直後に、凄まじい爆裂音が轟き渡る。
５．８キロ、９０ｍｍの砲弾が瞬間的に幾重にもの鉄骨フレームからなる銃から吐き出され、電撃によって加熱されて白く融解するように色を染めていた。爆炎が、コールタールを塗りたくったよう

な闇を瞬く間に引き剥がして、周囲にぞろぞろと雁首を並べる協会連中の姿をあらわにする。
衝撃波がまず衛士らを吹き飛ばそうとした。
そうして――肉眼で捉える暇もなく飛来した砲弾は、直後に凄まじい爆発音、衝突音で空間を激震させ、まるで途轍もない地震に襲われているかのように、大地が縦に激しく揺れた。
彼らに襲いかかっていた弾丸は消え失せ、悲鳴は全て爆音に飲まれる。
大地が砕け、衝撃によって周囲の連中が辺りに吹き飛び散り散りになっていたのが良くわかった。
衝撃音の余韻を残す空間、衛士は大きく息を吐きながら立ち上がる。
電磁加速砲（レールガン）と呼ばれるであろうソレだが、銃自体の構造は極めて単純であり、加速するためのレールがそもそも短く、密封性の一切がない。故に本来、それはまともに作動しないはずだし――だからどちらかと言えば、コイルガンと呼ばれる代物だった。
レックスは大地が深くえぐれて、既に血が蒸発して肉すらも消し炭、あるいは焼失してしまった眼前の無数の死体を眺めながら、大きく息を吐く。
およそ彼の正面から約一五〇度に面していた連中は皆焼き尽くされ、あるいは衝撃によって吹き飛ばされていた。八割が死にいたり、残りは深刻な怪我を負い、呻きながら横たわる。
他の連中はそれぞれ立ち上がろうとしていたが――。
「よ、っと……」
衛士は中腰になって銃を構える。
安全装置を解除し、そのまま単射へと切り替えた。
「オレは夜目が利く方だからな」
こなれた様子で引き金を弾き、発砲。
弾丸は、今まさに呻きながら腰をあげようとしていた男の、ちょうど胸部の真ん中辺りに食い込んだ。

血しぶきを散らして、男が倒れる。悲鳴も何もない、あっけない最後を、されど衛士は見届けない。その瞳はさらなる獲物を探し出していた。
発砲、発砲、発砲――いつものように、既に身動きのできなくなった数十人に、ひとりずつ一発だけ鉛玉をくれてやる。男達は、あるいは女達はコイルガンの余波で意識を朦朧とする中で、絶命していく。
数分もしない内に、彼らを取り囲んでいた無数の敵は、命を散らして滑走路の真ん中に倒れ込んでいる光景が出来上がった。基地へと続くその道の一部が激しく抉れているものはどこか爽快、ないし圧倒的な気持ちになれたが、彼らはそういったものではない、もっと別種の――自分たちは完全無欠だとでも言いたいような余裕を持っていた。
衛士は空になった弾倉をポイ捨てながら立ち上がり、交換しながらレックスと先頭を入れ替わる。
「雑魚には構ってやろう。オレたちの仕事は殲滅だ」
「オーライ、了解だ」
上気した顔で、ボタンを元の位置に戻したレックスが肩を叩いた。鉄骨銃はその先端と内部構造をやや融解させているようだったが、あの発射後にその程度の損壊ならば、あと幾発撃てるか、と心配する必要はないだろう。
「ここからが本番ですしね」
神父服の前面を開けて、革のズボンに、ゴテゴテのネイルアートでもしたかのようなベルトが目立つ格好。インナーは黒いタンクトップで、翻る神父服の内側には無数の予備弾倉と、また腰には大口径の拳銃が顔をのぞかせる。
単純に神父服に括りつけるバトルナイフもあって、割合に彼も装備品は豊かに思えた。とても、敵の基地に乗り込むといったソレでは到底無かったが。
「猫に噛み付いた鼠が、最終的にどうなるか思い知らせてやろぜ！」

衛士の言葉を契機（きっかけ）にするように、彼らは作戦通りの陣形をつくって、ぞろぞろと入り口から出てきた兵士へと走っていった。

## 任務：殲滅せよ？

『そうだな。あの無反動砲を持ってる奴は知り合いだ。それに――』
スコール、レックス両名の背後で中腰になり、衛士はナイトヴィジョン仕様のライフルスコープを覗き込んでそう告げる。
常に先頭の斜め後ろに位置する男、それにその傍らに着く男。それはオレが殺す。彼はそう言って、止まること無く走り続ける両者の脇を抜けるように、発砲した。
――弾道が逸れる。
本来その頭部を打ち砕くはずだった銃弾は、紙一重で側頭部の皮膚をそぎ落とすだけに終わった。
『……良かったなスコール。同類が居たみたいだ』
「気楽に言ってくれますね」
腰のベルトに無造作にねじ込まれた二挺の拳銃を引き出す。五〇口径の自動拳銃だったが、それぞれは同じ拳銃ではない。一つはデザートイーグルと呼ばれる、およそ大口径の拳銃と言えば思い浮かべるであろう有名なソレであり、自動式拳銃の中で世界最高の威力を持つ弾薬を扱えるシロモノだ。
さらにもう一挺は、オートマグと呼ばれる、世界で初めてマグナム弾を使用する自動拳銃の、後継機だ。とはいえ、それは最初期のソレとは違い、基本的な構造はコルト・ガバメントのコピーモデルをベースにしており――簡単に言えば、その二挺はつまるところ、マグナム弾を使用する大口径の拳銃だった。
射撃姿勢や扱い方を間違えなければ非力な者でも撃てると言われているが、それを二挺となれば話は変わる。傍から見れば格好をつけた、調子に乗った学生のようなものだ。
「時衛士！　居るんだろう！？　姿をあらわせ！」
衛士が狙撃銃を構えながら走りだす。その中で、入り口付近で待機する十数人の協会連中からそういった声が上がった。

「一対一（サシ）だ！　私と決着をつけろクソ野郎！！」
声と共に、狙撃されるといった心配を持たぬように、砲筒を肩に担ぐ覆面姿の女性が躍り出る。
「どうするんだい？」
困惑するようにレックスが言った。
『しょうがない。いつでも攻められる側にゃ時間がないんだ。一分以内で済ますから、掃討の準備でもしててくれ』
「了解」
「わかりました」

「やれやれ、誰だよお前」
二人に下がってもらい、入れ替わるように衛士が前に出る。
対峙するのは、無反動砲を構える女性だ。覆面のせいで顔がわからないが、その華奢な体付きは確かに女性のものだと思われた。
衛士がそういうと、彼女は乱暴に覆面を脱ぎ捨てる。
「私を忘れたのかクソ野郎！」
「そんな下品な女の知り合いは居ないな」
「あの夏の思い出だ。しらばっくれるんじゃない！」
「夏、だあ……？」
わけのわからぬことを言う彼女に、衛士は思い返すようにそうつぶやきながら――引き金を弾く。
だが弾道は、胸を狙ったのにも関わらず彼女の腹部をかすめるだけに終わった。
なるほど、スコールの下位互換。つまり単なる念動力だ。
彼は理解するや否や、腰の専用ポーチから缶スプレーのようなものを取り出すと、すかさず底にあるピンを引きぬいた。
途端にプシューと空気が抜ける音が小さく聞こえてきて、缶の中からは消化器の中身をまき散らしたように、白煙が周囲を覆い始める。衛士は缶を思い切り適当な方向に投げ捨てながら、耳のイヤホンを指で押し当て、指示をした。

「オレが先に行って潜入する。作戦Ｂに変更だ」
『わかった。蹴散らせばいいんだろう？』
「ああ、任せたぜ」
闇の中は、さらに黒い影で辺りを包み込まれていた。これで視界は最悪、完全に何も見えなくなり――空気を切り裂くように、無反動砲が発射される。弾頭は滅茶苦茶に、彼の遙か横方向から背後へと、煙を突き破って過ぎていく。
衛士は短く嘆息しながら音の方向へと狙撃銃を構え、
「卑怯だぞ！　貴様……出てこい！　貴様は、私が――」
発砲。
鈍いうめき声が聞こえ、どさりと倒れる音がする。それを確認して、衛士はそのまま煙を突き破るように走りだし、兵たちの動揺を他所に、闇にまぎれて包囲網を簡単に、隙間を縫って通過する。
彼はほどなくして施設内に潜入して――ようやく作戦が、開始した。

侵入者に優しくない通路は閉鎖空間故に暗く、明かりの一切がない。衛士は肌に感じる緊張と、来る前に頭の中に叩きこまれたドイツ支部の見取り図を思い描きながら、脳内のマップに己のマーカーを紅く点滅させた。
外から、やがて機関銃の金切り声が響きだす。あの煙も晴れて、満月の下でようやく交戦が再開したという知らせだった。
大きく口を開ける両開きの門から程なく進むと、暗闇の中から限りなく抑えられた気配が感じ取れた。衛士は負紐を掛けて狙撃銃とカービン銃を交差させるように備え直すと、コートの内側に腕を通し、そのまま走りだす。
「くッ、構うな！　撃てえッ！」
塗りたくられた闇の中に火花が散る。衛士はそれを”視て”、限りなく行動が予測されているという事を伺わせぬようにしながら、避け、走り、肉薄。

コートの内側から抜かれたブッシュナイフは、流れるような流麗さを以て、闇のなかでより一層濃い影になるソレへと振り上げられた。すぐ脇で銃声が轟き続け、間もなくそれが悲鳴へとなり変わる。

ナイフはその直後に、男の首を切り裂く手応えを覚えた。熱い液体が全身に振りかかり、ひゅーひゅーと喉から息が抜ける音がする。

衛士は素早く死体へと変わった男の腹を力一杯蹴り飛ばすと、その背後に構えていた二人の男が悲鳴を上げて将棋倒しになった。

腰から拳銃を抜いて、早くも無抵抗になる二人を射殺する。

武人、あるいは暗殺者とは大きく異なる――異質すぎる実力。強さ。

暗闇の中で、まるで真昼間に外を動くように駆けて動き、銃口はもちろん相手の影さえも見えていないのにもかかわらず、全ての銃弾を避けて敵を仕留める。その行為には一切の躊躇いはなく、むしろ嬉々として己から飛び込む、殺人鬼に似た様子さえあった。

衛士が短く息を吐いて、頭の中の地図から目標位置までの通路の最短距離を再確認する。

その中で、”ようやく”現れた影は通路の中に狭苦しそうに立ち上がって、彼から十数メートルほど手前で足を止めた。

巨体の胸元から、まるで車のヘッドライトのように対になる照明が一度明滅してから、鋭く閃光を走らせる。輝きはそうして間もなく通路を照らすと――衛士は顕になった、その銀色の巨躯に短い嘆息を漏らした。

――日本の機関は、人材に金をかけた。それこそ特異点能力の開発や、副産物の開発、あるいは軍事訓練や火器類に重点を置いている。

だがアメリカや、ドイツが同様である事は決して無かった。

確かに特異点や、特異能力といった、普通に時代を歩んでいれば決して関わることのない、開発することのない異質な能力にはその希少性を見出してはいたが、圧倒的な人材不足を考え、主な軍事能力として取り入れようとは考えなかった。

それ故に、技術を活用する方向はそれぞれ異なったのだ。
アメリカは通常の軍事力を、純粋に増幅させた。副産物の中で最も有用性の高い耐時スーツを量産し、個人の身体能力強化による作戦幅の増大や、作戦の成功率を高めることに注目した。
ならばドイツはその技術を何に活用したのか。
答えは、目の前のソレだった。
『くはは、機関はこんなモンを作ってんだな？　マンガの読みすぎだっつーの！』
分厚い、丸みを帯びた装甲板はシルバーに輝いている。人間のごつい両腕を持ち、太い大腿部からは伸びる足もあった。それは、規格外の大きさを持つ人間のような姿で――西洋の鉄仮面のような顔には、横一線に耐熱ガラスのような液晶モニタが埋め込まれていた。
人にあって、人に非ず。
それは確かな人型の兵器として、通路を阻む形で立っていた。
ＭＰ４をそのまま巨人用に作り直したかのようなソレを構え、その『ロボット』は外部スピーカーから下卑た笑い声を響かせていた。
――ドイツは兵器に技術を使った。
全長五メートルの人型兵器。その他にも戦車や戦闘機、その他もろもろの軍用兵器は、まるでマニアのコレクションのようにところ狭しと収容されていた。もちろん改良に改良を重ねた兵器たちである。
『そんな棒切れや豆鉄砲で挑むのか？　舐めてんのか？　ああん！？』
装備は現地調達。その装備が潤沢に整えられている機関を乗っ取れば、持参する以上に兵装は整うだろう。
ここが基地の中でよかったと、衛士はつくづく安堵した。
もし外でこれと出会えば、援軍は容赦なく来るだろう。人間に対して戦車、人間に対して戦闘機。海も近いから戦艦からの支援砲撃も可能だ。
まるで敵が攻めてくることを想定したような装備であり、位置で

ある。もしこれを想定していたのであれば、やはりこの機関の代表も、衛士と同じく奇妙な予感めいたものを感じていたのだろうか。
しかしそう考えれば疑問が、生まれた。
そうだ。
いくらたかが三人、日本支部始まって以来の屈指の実力者とも謳われる、特異点二名に、擬似特異点一名の組み合わせ。その三名でやや苦労するかもしれないこの潜入を、この三名に圧倒されてしまっている協会連中がどうして乗っ取れるのだろうか。
『なぁに突っ立ってんだ？　殺すぞ！　ぶち殺すぞ！』
ハーガイムなんて比べものにならない太い腕は滑らかに動き、機関砲を構え、引き金を弾いた。
まず狭い空間内に爆発音が反響して――衛士が素早く身を屈めて殺気を身体から引き剥がすと、床のコンクリートが砕け、壁の鉄板を貫いて穴が開く。強烈な破壊の嵐が大気を激震しながら降り注ぎ、発砲の衝撃が腹の底に染み渡るようだった。
弾丸を紙一重で避け続け、肉薄を試みる。
圧倒的な巨体に加えて、つい先日使い始めたばかりの兵器ということもあって――穴は多い。本当に、眼がついているのかと疑問に思うほどに、彼は容易に懐に潜りこむことができていた。
『くそがッ！　気安く触れるんじゃねええ――ッ！』
横っ腹から突き出る備え付けのハンガーのようなそれは、補助腕だ。男はそいつに機関砲を預けて、身を捩るように腕を大きく振り回して衛士の、ソレ以上の切迫を防ごうとする。
彼はそれを逆手にとって動き、素早く背後へと回りこんで、カービン銃を構えた。
『くそッ、くそッ、邪魔なんだよ、てめええッ！』
切り替え、全弾解放（フルオート）。
弾丸は瞬く間に弾倉から吐き出され続けて、分厚い装甲に火花を散らす。だが戦車のソレよりやや薄い程度の装甲板は、へこむことすら無く、表面に擦り傷を残すだけに終わった。

『じゃかあしぃんだよ、ガキィッ！！』
否、それは単純に装甲自体の強度に加えて、特殊なコーティングがなされているかだと、衛士は表面でにわかに見えた、火花に交じる青白い光を見て確信した。
電磁力によって至近距離からの敵弾を弾いているように見えたのだ。
恐らくは、貫通すれば弾丸が流体化するほどの電撃が流されるに違いない。
ロボットは振り返って、補助碗で機関砲を構えたまま、掃射を開始する。
空気を切り裂く爆裂音が再び鳴り響いて――衛士は舌打ちをしながら、回避を続ける。
「どうすりゃいいんだ、こいつは……っ！」
『たく、キミはいつでも無茶ばかりする――避けろ。二秒以内にだ』
イヤホンから声が聞こえるよりも早く、衛士は素早く壁に張り付くようにして人型兵器（ロボット）の後方へと移動した。
その直後の事である。
機関砲なんて比にならないくらいの爆発音と共に、白く融解する徹甲弾は一瞬にしてロボットの土手っ腹に食らいついて――装甲は見る間にひしゃげて、その巨体は衛士の横を通過して、通路の奥へと吹き飛ばされていく。
肌を焼く凄まじい熱を覚えながら、衛士は短く息を吐いた。
『兵器担当はボクのはずなんだけどな』
『そしてわたしは掃討担当です。エイジさんは確か――主犯格を探して尋問する役目のはずですが』
大きく口を開ける入り口の方から声が聞こえて、衛士はやれやれと首を振った。
嫌になるほど頼りになる連中だ。
ひとりきりなら、ロボット相手に数分もここで時間を潰す羽目になっていただろう。

衛士は弾倉を入れ替えながら、振り返って小さく頷いた。
「悪かったな、ボンクラで」
『どうでもいいが、ボクは先に格納施設（ハンガー）へと向かう。任せたぞ』
『わたしも、これから人がもっとも待機しているであろう場所へと行きたいです。さっさと仕事を終わらせたいので』
「好きにしろ。オレはこのまま先を進む」
『なら』
『そういうことで』
合わせるように二人は言うと、通路へと駈け出して、瞬く間に衛士へと近づいたかと思うと――両者は激励変わりにと背中をたたき、あるいは肩を叩いて衛士より先へと走り去っていった。
彼はそんな、妙な友情かなにかのような、胸が暖かくなるような感情を覚えながら、前へと歩き出す。バチバチと装甲から漏れ出した電気が迸るのを見ながら、衛士は再びブッシュナイフを構えて、目的地へと走りだした。

## 任務：殲滅せよ？

記憶したマップを現実に反映させ、耐時スーツに搭載された機能を発動。すると間もなく、顔にはゴーグルもヘルメットも装備していないのにも関わらず、視界の右上には蛍光色に光る地図が表示された。

「にしても……」

視覚は強化されていて、可視光線の幅が大きく広がっていた。それ故に景色は白黒なれど、その暗闇の中ではしっかりと全てを見ることができていた。

「面倒だし――敵が居ないにも程がある」

分岐点から目的地へと通路を曲がると、すぐに道を塞ぐ隔壁が降ろされていた。

レックス・アームストロングは隔壁近くの壁に向かい、張り付いている操作パネルに手を伸ばす。するとその掌から伸びた青白い閃光がパネルに走り――電子的干渉を可能とした。彼が放つ電気は瞬く間にその隔壁の機能が作動する。

パネルはその液晶部分を輝かせて起動し、見る間に、パスワード確認の画面がスルーされていく。入力の間もなくやがて画面はオールグリーンにまたたいて、意識し、電力を流し込んだ。

すると隔壁は緩慢な動作で大きく口を開け始めて……。

それを幾度か繰り返した。数メートルの間隔で閉ざされていた隔壁はそれぞれ連続したものではなく、一つ一つ仕様が異なっているために同時に全てを開けることは出来なかったのだが、それでもその行為に苦労することは決して無かった。

マップには生体反応が確認されない。

本来ならば、この機関を守るべくそこかしこに配置されていてもおかしくはないのだが、それがなかった。

だとすると、既にここは放棄されたのではないか？

あるいは、ここに誘い込んだ事自体が罠で、最深部に入り込んだ時点で、逃げられない地点を通過した時点で何かが作動する。それが爆発物である可能性は大いにあった。
経験則上、そういった場合はまず不審点を探しだして、この建造物を効率よく崩壊できる位置を探して爆弾を探しだす……爆弾処理の技術は持ち合わせていなかったが、このあまりにも便利な耐時スーツがあればなんら問題はない。
だが――。
「あるいは……」
敵はこの人選を見抜いていたのではないか？
機関でも重要視される特異点二名の排出。この作戦はそれほどに重要であり、また困難である機関の奪還だ。もちろんそれを防ぐために協会は、おそらく機関の装備や人員さえも最大限に活用して抵抗してくるに違いない。
だからこそ、日本支部は最精鋭を贈ろうと考えた。決して比喩ではない一騎当千の実力を持つ三名を送れば、機関奪還は容易ではないが、可能となる。
しかしもし協会が、この三人が出てくると”予測”していたのならば――日本の機関から、最も邪魔な三人が居なくなると、機関の技術を持って予測されていたのならば。
――やがて最後の隔壁が口を開ける。
レックスはその向こう側へと滑りこんで、通路を掛ける。最奥には頑強な錠前をつけた鉄扉が格納施設（ハンガー）への道を塞いでいた。
先ほどと同様に鉄骨銃を構え、鉄塊弾を装填する。
右肩の突起を親指で押し込むと、全身から溢れる電撃が爆発的に増幅されて、バチバチと、意識する間もなくそれらは一挙に銃へと押し寄せて凄まじい電圧をはらんだ。
「ふう……」
張り詰めた肺から少しだけ空気を吐き出して、意識する。
引き金のない銃は、その直後に電撃を周囲にまき散らして真っ白

になるまで加熱された弾丸が放出されて――刹那、鉄塊は鉄扉の土手っ腹に撃ち込まれた。錠前は瞬く間に砕け散り、扉はひしゃげて半壊し、両開きのソレの半分は、向こう側の空間に吹き飛ばされていく。

途端に閉鎖的な空間に全身を嬲るような暴風が流れこんできた。

レックスはまた鉄骨銃に弾丸を押し込んでから、腰の専用ホルスター……と言うよりはベルトで固定するだけの固定器にそれを戻してから――選択。

彼は次に、右胸の突起を押し込んだ。

今度は全身に蒼い閃光がまとわりついて、それが徐々に両腕に集中し始める。貫手を作ると流れこむように電撃がバチバチとほとばしり――やがて諸手に、対なる電撃の刃が出来上がった。

「どちらにせよ、もう遅いか」

考えても仕方がない。

彼はそう頷いて、格納施設に走りだして……足を止める。

思わず息を飲んだ。

考えても仕方がない。だが、今から行動するのは、あながち遅すぎるわけではないのではないか。

全ての攻撃的手段を一時的に破棄して、彼の肉体から放出される電撃を停止する。

彼は念のために腰に提げていた、電気伝導率の高い物質で構成されたバトルナイフを抜く。それは、電磁作用によって刀身が高速振動し、いわゆる高周波ブレードとなる武器だ。

それを握りながら、近くの壁を背にして屈み込む。耳のイヤホンを指で押しこむようにして、周囲の状況を確認しながら発信した。

――その数分前。

同様に隔壁に阻まれた通路を、念動力で強引に全開にして進み、全ての通路を探索していたスコール・マンティアはこの現状に、一つの仮定を上げていた。

敵は既に撤退し、この施設を放棄している。
あまりの閑散さを見て、彼はそう思わずには居られなかった。
あの入り口や滑走路に居た敵は、およそ通常通りに襲来に対応していた。だがそれは、まだこの施設が敵、つまり協会にとって重要なものであると錯覚させるためなのではないか。
話では、先日この機関の特異点が協会とつながっていることが発覚したそうだ。その彼はついこの間に、時衛士の手によって抹殺されたが――その、協会と繋がっていると知ったのが、逃げのびて今日本支部にて保護されている二名の男だとしたら。知っていたのが、その特異点だけではなく、彼ら以外の全てのことだとしたら……。
彼はやがて、分岐する幾本もの通路の最後の一本、その最奥の扉を蹴破ってから、構えた拳銃を一挺だけホルスターに戻して、イヤホンを耳に押し当てた。

『ボクたちは』
『わたしたちは』
『――嵌められた！』
同時に重なる声音は、全くブレる事無く時衛士の耳に届いていた。
「そうかそうか、オレたちは嵌められていたんだな？」
カービン銃を構えた彼は、虱潰しに通路をゆくのではなく、そのまま殲滅命令を掲げたのにもかかわらず、全てを無視して目的地にだけ集中した。
そしてたどり着いたのが、巨大なモニターがいくつも壁に張り付いている司令室だった。
長机にいくつモノパソコンが並ぶが、その席に着く者は誰一人としていない。
モニターの一切は起動しておらず、だが照明が周囲を照らす空間には、ただ一人の男が立っていた。
「それをどう思う？　なあ、ホロウ・ナガレ！」

叫ぶと、男はうるさそうに両手で耳をふさぐ。顔には、薄い笑みを貼りつけたまま男はやがて口を開いた。
「やかましい、聞こえてんだよ」
「これ以上、オレから何を奪うつもりだ」
引き金に指をかけたまま、全ての元凶とさえ言える男に言葉を投げる。
どちらにせよ予測できたことだ。
機関だって、あの時に救出していた二人から話を聞いたに違いない。自主的に話さなくとも薬なり機材なり使えば記憶を引き出すことは可能だ。
だから、日本支部は確実に抵抗手段を残している。
もちろん、それがドイツの機関に加えた数百の協会連中、付焼刃（スケアクロウ）という戦力に対応できるとは限らないが。
「失えば失うほど、お前の力は未来を変える。既にお前は、俺の知っている世界では死んでいる筈なんだ。生かしてやっているんだから、そろそろ俺に力を貸してくれないか？」
「言っている意味がさっぱりわからんな。てめぇの知っていることを、オレも知っていると思ってんじゃねえぞクソ低脳が。オレはな、てめぇみたいなバカが大嫌いなんだよ！」
「ははっ、高等学校もまともに出てないお前に言われたくないよ。なら説明しよう。何を聞けば良いかわからないだろうから、信じられなかったとしても構わない、一から説明してやる」
黒いコートを翻して、近くの椅子に腰をかける。そのまま肘置きに腕を置いて、足を組んで、ナガレはごくリラックスしたような体勢で告げた。
「まずは我々、協会の今後だ」
一つ息を置く。
その前に、と、ナガレは衛士を指さした。
「常に狙われてるっていうのは気分が悪いな。銃を降ろせよ」
「……ああ」

引き金を引いても、どちらにせよこの男を殺すことはできない。
今持っている手段はすべて通用しない。それを、彼はよく知っていた。
衛士はそのままカービン銃を投げ捨てて、片足に体重を掛けるように立ち、腕を組む。
ナガレは機嫌がよさそうに頷いた。
「仮面の男がいたろう。あの刹那（セツナ）だ。彼は実は、協会創設にあたって協力してくれた恩人の息子でな。国防長官の息子で、ついこの間、その恩人が死んだ。そしてセツナは有能な政治家では無かったが、有能な軍人ではあった。彼のつてで新しい国防長官になった男は、ある程度の指揮権を彼に委ねてくれた。今回の作戦はそこから始まった」
「……アメリカも軍が動き出した。話は聞いている」
「軍事力は米軍に依存していたからな。技術さえあれば、従うと信じてやまなかったらしい。被害もそう出ずに終わるだろうが……いや、アイツらは追い込まれると何するかわからん。どちらにせよ、政府があの技術を奪いに来たら米軍にも死者が出る。セツナにはそう指示している」
「お前は何がしたいんだ」
「こんな事をしたくない未来を創りたい。はは、格好いいセリフだろう？　お前がこちらに来てくれれば、全ては完結するんだ。何もない、元の世界に戻るんだ」
うわ言でも言うように、妄言を吐き散らすようにナガレが口にする。言葉のそれぞれは、まるで典型的な、”未来から来た過去を変えようとする男”そのものだったが、抽象的すぎて信ぴょう性に欠けていた。
衛士は眉をしかめたまま、うんざりしたように首を振る。
「何が目的なんだ。機関を潰すことか？　あの技術を、自分のものにしたいのか？」
だから、答えて欲しい方向を作ってやる。

すると途端に、ナガレは舌打ちをした。どうやら機嫌を損ねてしまったらしい。
「あの技術を無くす。そうすれば金輪際、あの技術はこの世界には持ってこれない……その後俺は、また”あいつら”が愚かなことをしないよう警戒し続ける。それだけだ。なにも贅沢な望みではないはずだぞ？」
「要領を得ないな。あんたは”どこ”から来たんだ？」
「出身は一応、日本だが」
「……今から何年後の未来から来たんだ？」
「八年。機関がちょうど、”世界政府”を作った辺りからだな」
当たり前のように訊くと、当たり前のように言葉が帰ってくる。
ナガレはそこで、先走っていた思考を落ち着かせるように大きく息を吸い込んだ。
脳みそを冷却するように呼吸を繰り返し、それから頬を叩く。
「そうだな。お前は予感を感じていたみたいだが、どうやら確かに認識しているわけではなかった。そうだ。俺は未来から来た。未だ残ってる、今では地方で雑務に追われる公務員程度の仕事しか任されないようなしょっぱい機関で、独占されていた時間遡行装置（タイムマシン）をなんとか使用してな。奴らが『未来から送り込んだ技術で過去に機関を創設した』ように、俺も過去に行って未来を変えようと、この機関を潰すためにここに来た」
恐らく、協力してくれた仲間は死んだだろう。あの装置を使用すれば、その波動がすぐに周囲に知らせてくれる。
だがなんとか過去には戻ってくることが出来たのだ。まだ若い自分が居る過去へと。
彼はそう告げた。
巻き戻った時間に、その時間軸に居る自分と、未来から来た自分が接触すると、有無をいわさず同化する。その際に拒絶反応が起これば、肉体が異形化して死ぬ。だが適正があれば肉体は、その時間軸に全てを合わせられてしまう。だが記憶だけは、引き継ぐことが

できていた。
そして本来、現在(いま)より遥か未来に手に入れる予定だった特異点能力も引き継いだ。否、正確には初めて特異点能力を持てたといっても過言ではないだろう。
ソレまでは、精鋭部隊のみに与えられた『擬似特異点スーツ』を装備していただけだから、生身でそれを有するのは初めてだったのだ。が、何年も使い続けたお陰で、使いこなすのはあっという間だった。と言うよりは、手に入れたその瞬間から使いこなせていたと言うべきだろう。
そしてそれを怪しまれぬように、わざと副産物を被弾した。
彼の想定していた作戦は今ようやく動き出したところだったが――彼の行動は、今から約五年ほど前から動き出していた。
なんでも無いように口にする言葉の数々。
証拠などないから信じようもないし、ただの妄言だとも受け取れる。
だが彼が擬似特異点スーツの技術を理解していたとすれば、付焼刃(スケアクロウ)開発もそう困難であったというわけではないだろう。未来の技術が無くとも知識がある。特異点のように、その個人が持つ能力を成長と共に最大限まで発揮できる仕様でなくとも、それこそ付焼刃のように、一時的でも同様かそれ以上の力が出せれば問題ない。
そう考えれば、あながち嘘だと吐き捨てられるような内容ではなかったし――疑うまでもなく、時衛士はその言葉を鵜呑みにしていた。
「未来はひどいもんだ。典型的な独裁に、人間はモノみたいにＩＣチップを埋め込んで、郵便やら何やらは全て割り当てられた番号で送られてくる。銃規制はもちろん、許可を出さなければ仕事で使うちょっとした刃物も持ち歩けないし、持ち歩くなら政府から配布された専用のケースに入れなけりゃならない。放火を招くからって使い捨てライターだって手に入らないし、タバコは自販機に付属してるシガーライターでつけるしか無い。だっつーのに、麻薬が往来で

売買してる破滅具合だ。暴動は日常のように起こってて、五分以内に殲滅されるってわかってんのに、飽きずにみんな死にに行ってる」
思い出しただけでも死にたくなるぜ。
彼は、脱力気味にそう言った。
自分は公務員のようなものだったからまだマシだったが、一般市民はどの国も同じようなもので、娯楽は殆どが消えて薬に姿を変えていった。地下で、政府に隠れて営まれているカジノだって、実は政府が資金回収の為に経営しているらしい。
子供は十二歳から徴兵されて、二十になるころに解放され、素質があるものは軍隊に強制的に入隊させられる。
未来は既に、破綻していた。
彼はそこまで言って、大きく息を吐いた。
「今の機関はまだクソ弱い。まず権力者たちを味方につけていないからな。だから叩ける」
「……オレは、どうなったんだ？」
「ああ、お前は……気のいいやつで、仲が良かったんだがな。ちょうど今年の秋だったか。アフリカだかどこかに行く任務で、敵だった特異点と一緒に機関から逃げ出して――覚えてるさ。弾薬もないし、自害用の手榴弾もない。かつて仲間だった敵に追われて、逃げて、敵だった特異点に庇われて死なれて……それ以上は精神が保たなかったらしい。さすがのお前でもな。今は、違うみたいだが」
「そうか……」
自分は死んでいた。
つまり、彼の知っている未来は既に変わっている。
ならば本当にこれから、機関が潰されて、彼の言う未来は失われるのか？
イヤ、そもそもこの時間軸の未来が変わったとして――本当に彼が居た未来（せかい）も、同様に変わるのか？　元々平和でしたみたいな面を下げて、それまで恐怖政治していた首相が悪びれもなく国民ににこやかな笑顔で手を振っているのか？

それだけは信じられない。
並行世界という考え方があるくらいだ。
そういった悲惨な未来がある。そういった世界が同時に存在している。多分は、そういうことなのだろう。
だがこの男は、自分の世界と同じ悲劇を繰り返させないために、世界を変えようと単身で動いてきたのだ。
――家族を殺されたから、殺し返そうとしていた自分とは大きく違う。全く別の生き物のような考えに、衛士はただ呆然とするしか無かった。
「正直な所、あんたの言葉は信じられないものばかりだ」
だが信じるに値するものばかりでもあった。
しかし割り切れない。
こいつには惹かれるものがある。この勇敢さ。積極性。そして実質的な強さ。行動力。
全てが自分を上回っている上で、さらに世界を股にかける大きさ。悲劇を体験してきたからこそ垣間見える、どこか達観したような面持ち。
「機関には、オレの全てがあるんだ。全てを失くした、オレの友達が……」
「――なあ、ついこの数ヶ月前まで来ていた未来からの刺客が、途絶えたんだ。この意味がわかるか？」
「……？」
不意に話題を転換する。
そんな彼に、衛士は思わず首を捻ると、ナガレは気の抜けたような顔で口にした。
「少なくともこの時点で、俺の作戦は成功したんだ。俺の作戦のお陰でそもそもの戦力が弱まって、その上で恐らく……消滅した。これでもう、ジョンにも、スティーブにも会えない。俺に好意を見せてくれたティファニーも、ユウコも居なくなっちまった。だがこれで良いんだ。なあ、そう思うだろう？」

「……並列する時間軸は存在しないのか？」
「堅ッ苦しい疑問だな。今の俺の言葉は推測だが、これが本当にそうなら存在はしないな。あるいは、ただ単に並列世界に干渉する術を失くしたのか。つまり、俺の行動が未来を変えたのではなく、影響を及ぼして技術を退化させたのか……後者はあまり考えたくないが、”あり得る”仮定ではあるな」
「……ここまで来て、成功したと確信して、オレの力がどうして必要だろうか？」
既にここで敵を撃とうと変わらない。どちらにせよ、協会での復讐が終われば機関もいずれ潰す予定だった。もちろん彼のように用意周到ではなく、ほとんど自滅覚悟での特攻予定だったのだが。
圧倒的な武力を前にするよりも、気が抜けた。
力だとか、能力だとか、作戦だとか……そういったものを引っくるめても、この男には敵わない気がする。いや、正確には対峙したくないのだ。
特攻するよりも暗殺するタイプ。暗殺するための技術を用いて特攻する衛士とは逆のタイプだった。
「より確実にしたい」
「……だが、やはりオレは、みんなを殺されたくないんだ」
うつむき、言いにくそうに吐き出す言葉に、ナガレは重そうに腰を上げる。そうしながら、近くの机にあった拳銃を手に取った。
木製グリップに換装されたそれは握りやすく手にフィットする。銀塗りの銃身は滑らかに伸び、また複列弾倉（ダブルカラム）として実用拳銃の中では初めてのソレである拳銃は、その弾倉数の多さからハイパワーと名付けられていた。
そのＦＮブローニング・ハイパワーとは別に、近くには小銃が置かれていた。木製フレームに、鉄製の銃口。さらに特徴的なのは、ボルトアクションをそのまま自動化させたような機構を持っている。だからこそ、自動小銃としては割合に高い命中精度を誇ることができていた。

Ｍ１ガーランドと呼ばれる小銃を、彼は次いで負紐を引っ張り上げて肩に担いだ。
「男にはな、決断しなきゃならない時がある」
スライドを引いて、薬室（チェンバー）に９ｍｍの軍用弾（パラベラム）を送り込む。
ホロウ・ナガレは短く嘆息した。
「最後だ。俺についてきてくれないか？」
――衛士はその言葉に、不意に思い出した。
コートのポケットに手を突っ込んで、そうして干からびた草を取り出す。それは変色し、水気すらなくなった四葉のクローバーだった。
「オレの言う人たちを、殺さずに居てくれるなら」
「無理だな」
「なら……駄目だ」
「そうか。お前を生かして敵にまわすと、以前ならまだしも、今は厄介すぎるからな……」
片手で銃を構え、額に照準する。
ナガレはまたため息をついた。
「悪いが、未来のために死んでくれ」
銃口に火花が散る。
乾いた破裂音が空間内に響きわたって――。
「――させませんッ！」
弾丸が、その眼前で弾かれる。見えざる力によって、わずかに軌道が逸らされて、銃弾は衛士の頬を掠めて過ぎていった。
そうして背後から現れる強い気配。
二人の男が、やがて衛士の前に立ちふさがるように現れた。
「……いい仲間だな。失いたくなければ、俺の邪魔をするなよ」
ナガレが前に出る。それに構える両名に、衛士は静止するように肩をつかんだ。
「行かせるんだ」
そう言えば、彼らは妙に素直なまでに、少しだけ驚いたように二

人で顔を見合わせてから頷く。
道を開ければ、通りすがりにナガレは衛士の肩を叩いた。
「オレは協会を潰す。だが、機関も生かしてはおかない」
「俺は協会を残さない。もちろん、機関を潰すのが優先だ。おそらく、アメリカの事が終われば、セツナが真っ先に向かうだろう。逆に言えば、それまでおあずけ状態だ。決定的な戦力がないからな」
「何時間後に来るんだ？」
「そうだな。総力戦になるから……ちょうど一週間後。十二月三一日だ」
「……そうか」
「今から五分後に、島の端っこに移動させておいた列車砲が自動的に作動する。全長４ｍで５トンの重さの榴弾だ。木っ端微塵に吹っ飛ばす予定だ。この基地にある装置はおジャンだ。転送装置は、アメリカのそれを利用する」
ナガレは淡々と今後の予定を衛士に聞かせてから、背中を撃たれるという心配もないように堂々と、その場を後にした。
残された三名はただ呆然とその姿を見送りながら――ややあって、衛士は機関に転送命令を下した。

## 任務：殲滅せよ　米支部編

世界抑圧機関アメリカ支部の主な敗因としてあげるとすれば、それはその圧倒的な技術の粋をそのまま軍事力の強化に使用したことにある。簡単にいえば、成り上がりの小金持ちのような存在になったことにあるのだ。

普段ならば購入を視野にさえ入れない火器類、車両、航空機をところかまわずカートに入れて購入した。そして戦闘は機関の職員を半分、残りの半分を米軍に頼っていた。

そしてその装備全てにはＳＦ映画よろしく生体認証機能が付与されていて、その使用の有無は機関が握っている。対立した今となっては、その高級な装備を米軍が使うこともできないし、あの身体能力を強化してくれる夢の様な耐時スーツも、見ることすらできない。

しかし――。

『作戦は順調だ。そちらはどうだ……ファルコン・ワン』

機関は米軍に依存している。それは決して、機関が圧倒的な資産と技術力を有していても覆ることのない事実だった。

だから機関の基地はとある米陸軍基地を増設する形で建てられたし、今ではそのほとんどの機能を相手側、つまり機関握られていて仕えるのは米兵しか存在しなかった。だがそれでも米軍が有利だと断言できるのには、理由がある。

インカムからの音声に、米軍基地よりやや離れた鉄塔隣の、少し低めだが周囲より目立たない、夜の暗がりに溶け込んだ建造物の屋上で待機していたヤコブ・ロデム＝スカヤは愛銃の照準器から、基地外で辺りを警戒する機関員を狙撃しながら、ややってから答えた。

「問題ない……といいたいところだけど」

『なにか問題か？』

イヤフォンの向こう側から、今まで対峙していた協会の男――刹那の姿を思い浮かべながら、ヤコブは軽く笑った。

「以前より少し痩せてしまったせいで、うまい具合にいかない。そもそも本業はデスクワークだったんだけど……」
『この作戦が終われば自由にすれば良い。我らは、機関以外に手を出さない』
――ヤコブは五年前までは妻帯者だった。三つになる子供も居て、覗き見（ハッキング）の趣味さえ除けば幸せな家庭を築いていた。しかしちょっとした興味本位でＦＢＩのサーバーにアクセスして、逮捕された。離婚したのはそれがきっかけで、それから軍……ハーガイムにスカウトされて現在に至る。
これが終われば、恐らく死なない限り時衛士らも全てから解放される。今は、これが終わってから何をしようか楽しみにしていたが、ひとまず彼らと会ってみてから考えようと、彼は考えていた。
もうパソコンをネットに繋ぐ予定もないし、軍で貯めた預金もある。エリザベス……娘が携帯を使いすぎても払える余裕はしっかりある。妻が奮発してダイヤの指輪が欲しいと強請ってきても、久しぶりに男気を見せて勝ってやる事もできる。
軍をやめたら銃を返して、でも未練ぶかくＳＶＤのモデルガンを飾って、お守りに７．６２ｍｍの軍用弾を一発だけもらって……よりを戻すためにブランド物のバッグでも買ってアリゾナへ行こう。ヤコブはそれを視野にいれていた。
引き金をひねれば、覗いた筒の先にいる人が跳ねて倒れる。そんな生活はもう終わりだと期待していた。
「あんたは、日本支部にいくのかい？」
『いや。全てはナガレに任せてある。我はここで、貴様らを生かす努力をして終わりだ』
「そう。ま、頑張って」
それだけ言うと、通信は途切れる。
ヤコブは嘆息しながら、わらわらと扉から溢れるように出てくる装備を整えた機関員の首、あるいは胸を撃ちぬき続けた。
が……。

「ん……」
照準器の向こう側で、一人の男が一枚の紙切れをあらゆる方向に掲げているのが見えた。そして徐々に、ほとんど一定の感覚で発砲を続ける中で、その行為をする者が増え続けていた。
不審な行動だ。いつものように撃ちぬけば良い。あの様子なら、何かに”かま”をかけているだけであるのが丸見えだ。
だがヤコブは倍率を上げた。その紙切れをズームした。
その行動を、彼は生涯で一番後悔することになった。
「……ッ？！」
息を呑む。
反射的に銃口がぶれた、強張った指先が引き金を絞る。
弾丸は初めて、男の太ももを貫通し――たった一発で対象を殺害できなかった。
位置が発覚される。
被弾した男がヤコブの方向に指をさして、数人の男達が集結した。
――その紙片は写真だった。
鮮明に盗撮されたらしい、そして最近のそれらしい写真だ。生活感あふれた背景に、自然な笑顔の少女が写っている。歳は十二、三だろうか、小学生か中学生ほどに見えるが、やや大人っぽい女の子だ。そしてそれは見覚えのある顔で――つい一年前の面会日に見た、娘の姿だった。
男は写真に指を突きつける。そして促すように隣を指した。
ヤコブは流れるように銃を動かして隣を見る。するとその傍らの男はメモ用紙をひらひらと揺らして、見せびらかすようにしているのが見えた。
――娘は可愛いか？
男達が言いたいことは、それだけだった。
指は無意識に引き金を弾き続ける。集まっていた男達の頭を撃ち抜き、そしてなめらかなまでの照準を二秒以内に抑え、射撃。射撃。射撃……。

基地内部の制圧から逃げてきた兵士はやがて失せたが――。
背後の扉が強引に蹴り開けられた。激しい衝突音と共に扉が勢い良く開扉し、そしてばたばたといくつもの足音が押し寄せた。
振り返るヒマもなく腰に弾丸を撃ち込まれ、対のふくらはぎ、そして左肩を被弾する。
思考(あたま)が真っ白になって、視界が真っ赤になる。振り返ろうにも身体が重すぎて動かなかったが、
「くそがッ！　くそどもがッ！　よくも、よくも――」
「お前は幸運だ」
喚き続けたヤコブの後頭部に、銃口が突きつけられた。
「本来ならお前のような狙撃兵(ひきょうもの)はより痛めつけるのだがな」
乾いた発砲音がした。
それとほぼ同時に粘り気の強い血糊が辺りに吹き飛び、ヤコブだった残骸が地面や、複数の男達に付着する。その直後にヤコブの、銃を構えていた腕はだらりと垂れて、支えを失った狙撃銃は無音のまま断崖となる屋上の向こう側へと落ちて――。
『……さらばだ。ヤコブ・ロデム＝スカヤ』
ヤコブにつながれたその通信を最後に、屋上にしかけられていた爆弾が全て起動した。

## 任務：殲滅せよ　米支部編　？

「おいＨＱ！　今の爆発音はなんだッ！　応答しろ！　ＨＱ！」
インカムにがなりたてる。聞こえるのはあまりにも酷いノイズで、返事が来ているのか――自分の声が聞こえているのかさえ定かではない。
けたたましい発砲音の中、ハーガイムは舌打ちをして障害物に隠れた。
そこは入り組んだ米軍基地、格納庫へ向かう通路のちょうど真ん中あたり。機関の侵攻を薙ぎ払い撃ち殺し、侵し返したど真ん中である。
燃料と弾薬のある格納庫は事前に遠隔操作によって爆弾を作動させておいた。そのため彼らは戦車、航空機、戦闘機など諸々の兵器を動かすことは出来ず、米軍の装備の一切は使用できない。
――こんなことなら、事前に整体認識ＩＤを作り、火器制御システムを完成させておくべきだった。
技術者でも何でもない彼は、そういったシステムの仮想があるのかさえ知らないがそうぼやいた。その存在を知ったのは、いつか読んだＳＦ小説でのことだった。
「ぐあっ！！」
「た、隊長――」
カービン銃の残弾を確認する。
残り十二発。
弾倉は八つ。
――感覚的に、部下が被弾し倒れたその場所。つまり、部下たちの方向へと銃を向ける。
直後に、その能力で瞬時に転移してきた男が現れる。愛しく頼りになる鍛え抜かれたかつての仕事仲間たちを葬った張本人だ。
「はっ、てめえら――」

発砲。
火花が薄暗い辺りを眩く照らし、男の胸板に無数の穴を穿つ。血飛沫を散らし、男は口から血の泡を吹く。弾倉の中の弾丸を全て打ち込んだ所で、既に絶命した男は地面に引かれるように倒れ込んだ。
「敵陣沈黙！　生体反応、確認できません！」
厳ついゴーグルを装備した一人が叫んだ。
「警戒を怠るな！　ゴー、ゴー、ゴー、ゴー！」
昂ぶる感情をそのままに男は吠えた。
第三小隊まで引き連れていたつもりが、気がつけば既に小隊規模にまで収まっている。
だが、良く訓練され特殊な、特異能力を有する装備に能力を持つ敵を相手にして、ただ訓練されただけの兵隊がここまで生き残っているのは奇跡的だと言えた。すくなくとも、ハーガイムの経験則上では。
弾倉を入れ替え、コッキングレバーを引く。
還暦を過ぎた男の戦いは、さらに熾烈を極めた。

ハーガイムが指示した六〇秒後、誰かが止まれと叫んだ。
喉が裂けんばかりの声は、遥か前方から響いてきて――凄まじい爆発音。強烈な衝撃に、周囲の部下が、前方で走っていた仲間たちが吹き飛んで襲いかかってくる。
眼前に迫る灼熱の業火。その薄暗い空間でナイトヴィジョンを装備していたら、視覚は白く染まり上がっていたことだろう。
また彼が先頭を走っていたら、爆弾か榴弾か――そういったものの爆発を直撃していたはずだ。
部隊で唯一、特異能力を有する彼ならばその存在を知覚するのは容易だったろうが、不意打ちを避けるのは至難の業だっただろう。
――結果としては、小隊のほとんどは使い物にならなくなった。
加えて通路は破滅的なほどに崩壊し、進行方向は黒く焦げて塞がれている。

生きているものは居るだろうが、動けるものは誰一人としていない――否、数に入れるとすれば、ハーガイムただ一人だ。
『聞こえ……か――ガイム。応……ろ、ハー……ム……！』
ノイズ混じりの声が聞こえる。
声による判断は難しかったが、おそらくは本部からの応答だ。
「来たかッ！」
『聞こえる……ハーガ、ム。聞こえるか、ハーガイム、応答しろ！』
声がやがて鮮明になる。
「ああ聞こえているッ！　何が起こった、ヤコブはどうしたッ？！」
かつて協会の創設者の右腕だった男は、焦りを隠さぬまま叫ぶように状況を説明した。
『全部隊が掃討された。連中は手練の”特異点”だ。総勢ニ八人の能力者が、貴様のもとに集結しようとしている！』
「何千人居たと思ってるんだッ！？　いや、何万――」
前方で爆発。
ハーガイムは本能的に身を伏せ、飛来してくる瓦礫をやり過ごす。
その直後に、光の尾を引く弾丸が無数に頭上を過ぎていった。発砲音は爆発の余韻に飲まれ――曳光弾は老兵の動きを牽制する。
「……たかが、五人か」
男は知覚する。
感覚を研ぎ澄まし、周囲の空気を、気配を、音を、衝撃を――その全てを自分のものとする。
もっともそれを操作できるのではなく、感じることが出来るだけだ。
彼はそれを、絶対知覚（コンプリート）と呼んでいた。
ハーガイムを軍から追い出し、異形たらしめた異能の力。そして多くの危機から己を救ってきた、唯一の能力だ。
『ファルコン――いや、ヤコブは死亡した。敵の心理戦に飲まれて殺された。爆発は、その屋上を崩壊させるために爆弾を作動させたためだ』

腰から手榴弾を抜き、間髪おかずに投げる。
男たちとの距離はおよそ八〇メートル。相手はハーガイムの姿を認識できていない。
――手榴弾は弧を描いて地面へと向かう。そのなかで、歴戦の勇士たる老兵は狡猾に照準を合わせ、引き金を弾いた。
フルオート射撃ではなく、僅かな一発。
その正確無比な弾丸は瞬時にして手榴弾の横っ腹を貫き、瞬く間に凄まじい爆発を巻き起こした。
無防備な五人は破片と共に爆発に飲み込まれた、かに見えた。
だが、完全に戦闘不能になったのは先頭の一人。
残りの四人は、その男を囮にしたのか――発砲音から即座にハーガイムの位置を特定し、射撃で牽制しながら前進してきた。
伏射で応戦。だが、影に隠れたり、角度的な無理が祟ったりなど、環境がハーガイムの敵となった。
硝煙で視界はゼロだ。そして地の理はお互いに五分五分と考えて間違いはない。
ならば、この空間すべてを知覚するハーガイムの方が分はある……はずだった。
二人が前にでて、そこからやや離れた位置の男が小声で指示を出す。その後方で、一人が狙撃銃を構えている。そう知覚する。
短い嘆息。
その巨躯を気怠げに引き上げ、ハーガイムは立ち上がった。
「おい、クソ共！」
声に反応する二名。
筋肉を硬直させること無く、狡猾にアサルトライフルを構え、引き金を絞ろうとしている男たち。
だがハーガイムの方が、僅かに早かった。
射撃音は交差すること無く、素早く二名の頭部を破壊する。脳髄が吹き飛び、声もなく脱落する。
地面にたたきつけられる音も待たずに、狙撃兵がハーガイムを狙

った。
飛ぶように大きく回避し、深く屈んで狙撃兵へと照準する。
だがそれを許さぬように、残った一人が牽制した。
そして――不意に業火が、巨大な塊となって飛来した。
『ほとんどは自爆で道連れにした。残ったのが、この連中だ――背後から十人。気をつけろ』
真正面の壁に飛び込むようにして回避し、すかさず応射。
能力の使用に慣れていないのか、先ほどの火焔で隙を大きく出した男は胸を射抜かれ、血を吹き出して殺害される。
制圧してきた通路から、けたたましい程の足音と怒鳴り声が響いてくる。
もはや隠密行動は必要ないと判断したのだろう。
「ここで死ぬかもしれん」
知覚できたとして、体が動くかは別問題だ。
体が動いたとして、攻撃を避けられるかも別問題だ。
適切な判断、即座の行動、そして運――それだけでは足りない。
なによりも物量が足りなかった。
「だがわたしは――やらねばならん」
ここで命を落すことになったとしても。
米軍本隊の援軍が来ないにしても、だ。
（トキと共に、戦ってみたかった）
そういう心残りだけはあったのだが。
壁を背にして、背後からやってくる敵陣へと牽制射撃。誰かに被弾したのか、悲鳴が聞こえた。
そして――不意に、目の前に影が現れた。
音もなく照準。
発砲。
頭が吹き飛び――その腹部が、突如として高熱を発し始めた。
「爆弾かッ！？」
生体反応の変化によって反応するのか、あるいは、誰かの能力か。

なんにせよ関係ない。
ハーガイムは狙撃兵の方向へと飛び込んで……爆発。
瞬時に空間は眩く輝き、瞬時にして、その通路を含む一帯が爆発した。

「やれやれ、これでいいのか？」
全身を特殊な強化装備（パワードスーツ）に包む男は、その手に短めのショットガンを提げてつぶやいた。
薄手の、タイツのような脆弱そうな装備。だがそれは肉体を効率よく、また人間の持ちうる最大限まで強化させてくれるものであり、防弾、防刃など、様々な衝撃から身を守ってくれる。
機関の産物だった。
祝英雄（いわいひでお）は機関から追放された身だ。日本支部の希望たる少年を殺害したからだ。
それと引き換えに得たものといえば、特にはない。
だが――拾われた先では、随分と働いてやった気がする。今回だってそうだ。
能力者集団を殺戮し、今度は死体の腹に爆弾を仕込んで瞬間移動させた。転移能力を持つ男はつい先ほどまで目の前にいたが……今では散弾によって肩口から上をすっかり吹き飛ばされて、跡形もない。
割合に近くで巻き起こった爆発の衝撃波を受けながら、男は応答を待った。
『……手段を選べ、と言ったはずだ』
これまで敵だった男、刹那は静かに発言する。節々から伺える震えた声音は、怒りを抑えているようだった。
「八ニ〇人が殺されてんだぞ？　生き残ってるったってよ、数えるほどしか居ねえはずだ」
実包を装填し、イワイは爆発の起こった方向へと走りだす。

強化装備に付属する無線機能は、まだ男の言葉を紡ぎ続けていた。
『たった一人の生き残りがそこに居た。座標は、ちょうどそいつの目の前だった』
「情にほだされてんのか？　おい司令部、冷静に物事を判断しろ。戦局を見極めろ。てめぇ様はそれでも、オレたちを煮えたぎったクソみてえに苦しめた敵の幹部か？」
『……司令部とて、我一人しか居ない。米軍は基地と一個大隊を託して逃げ帰ったさ』
「飼い猫に噛み付かれた程度でそれか。ま、この基地じゃ装備も兵器もろくに使えねえんじゃ、しょうがねえけどな。米軍の恐ろしいところは物量だし」
建造物の横腹に巨大な穴が開いていた。そこから吹き飛んで倒れている、人だった何かが無数にある。
遠くの方から罵声が聞こえてくる。爆発音を聞きつけた残党なのだろう。
『残り十三人』
「一分後にゃ、何人になってるだろうな？」
イワイは不敵に笑い、引き金に指をかけたまま、その通路に開いた風穴へと飛び込んでいった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0980x/

その男、神の眼につき　part2

2012年1月12日02時46分発行